

# 長原

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会  
財団法人 大阪文化財センター

# 長原

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会  
財団法人 大阪文化財センター



## 序 文

長原遺跡は、1974年に、地下鉄谷町線延長工事に伴って発見された遺跡である。遺跡の調査は、財団法人大阪文化財センターのみならず、財団法人大阪市文化財協会によって、毎年行なわれており、遺跡の実態が明らかにされつつある。

今回の調査は、日本道路公団が計画した近畿自動車道天理～吹田線にかかる長原遺跡第2次調査として1983年10月から翌年9月にかけて実施したものである。遺跡全体からするとわずかの調査範囲であるが、多くの成果を得ることができた。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに一般多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表するとともに、今後とも温かい御支援を賜わるよう切望してやまない。

1985年6月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉房康幸

## 序 文

当文化財センターでは、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線にかかる埋蔵文化財の発掘調査を、1976年より大阪府教育委員会とともに進めている。長原遺跡は、その最初の調査となった遺跡で、その調査の成果の概要報告書は『長原』として当センターより1978年に刊行された。今回の調査は、その時の調査でやり残した部分を行なうもので、長原遺跡第2次調査として1983年10月に始まり、翌84年9月に終了したものである。その調査成果は本書に記されているとおりであり、本書が長原遺跡の解明に貢献し、地域史研究の一助となるものと確信する。

大阪府教育委員会、日本道路公団ほか関係各位の調査に対する御支援、御協力に対し深く感謝するものである。

1985年6月

財団法人大阪文化財センター

理事長 加藤三之雄

## 例　　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、大阪市平野区長吉長原及び長吉川辺に所在する長原遺跡の第2次発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用35,913,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、1983年10月27日から1984年9月30日までの間実施した。
5. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪文化財センターが実施したものである。調査並びに本書作成に関係した者は以下の組織表のとおりである。

### 調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	小林廣喜
	次長兼総務課長	尾田勝之
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳慶・ 灰本明子・千野和久、田口宗義・宮本哲男・船山 洋子
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 杉本直子、主事 小島容子
調査総括責任者 業務課長		石神 怡(現 大阪府教育委員会文化財保護課主査)
		泉木知秀
	業務課主幹	吉村信夫
長田分室	主幹兼業務第1係長	中西靖人、技師 山口誠治
長吉分室	業務第2係長	赤木克視、技師 平井貞子
	業務第3係長	廣瀬和雄、技師 石神幸子・藤沢真依・杉木二郎・ 辻本 武・藤永正明・上林史郎・入江正則・阿部幸 一・岩瀬 透

上記の職員のほか、以下の学生諸君の協力を得た。

有山淳子、石野みゆき、伊藤佳子、福岡千波、猪股勝己、大松克守、表原隆文、田中直樹、  
知念れい子、辻宅京美、原田貴志、原村典子、森崎晃示、安村和久

6. 本書の造形実測図の方針はすべて座標北を示す。
7. 本調査にあっては、写真・実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを多数作製したが、そのすべてを本書に掲載することは不可能であるため、本書記述以外の資料については、財団法人大阪文化財センターで保管している。広く利用されることを希望する。

# 長原（その2）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

## 目 次

### 序 文

### 例 言

第Ⅰ章 遺跡の環境	辻本 武	1
第Ⅱ章 調査に至る経過および調査の方法		
第1節 調査に至る経過	中西靖人	3
第2節 調査の方法	辻本 武	5
第Ⅲ章 調査成果の概要		
第1節 基本層位	辻本 武	7
第2節 古墳時代の遺構と遺物	//	9
第3節 平安時代前期の遺構と遺物	//	17
第4節 平安時代中・後期の遺構と遺物	//	21
第5節 鎌倉時代の遺構と遺物	//	28
第6節 まとめ	//	33

## 図 版 目 次

図版	長原（その2）調査区全景
図版1	6、7、8区航空写真
図版2	1、2区古墳時代遺構全景
図版3	3区古墳時代遺構全景、6区竖穴住居跡
図版4	9、10区古墳時代遺構全景
図版5	11、12区古墳時代遺構全景
図版6	4、5区地山面遺構全景
図版7	6、7区地山面遺構全景
図版8	7区掘立柱建物2、3
図版9	8区地山面遺構全景、ピット1
図版10	5区井戸1、2
図版11	6区井戸4

- 図版12 2区井戸7
- 図版13 6区井戸3、10区鎌倉時代遺構全景
- 図版14 11、12区鎌倉時代遺構全景
- 図版15 1、2区鎌倉時代遺構全景
- 図版16 古墳時代自然流路、溝1出土土器
- 図版17 古墳時代自然流路出土土器
- 図版18 自然流路1、2出土土器
- 図版19 古墳時代各遺構出土土器
- 図版20 古墳時代自然流路、溝1出土形象埴輪
- 図版21 自然流路2、3出土埴輪
- 図版22 平安時代前期遺構、包含層出土土器
- 図版23 平安時代前期遺構、包含層出土土器
- 図版24 平安時代中・後期各井戸出土土器
- 図版25 平安時代中・後期遺構、包含層出土土器
- 図版26 平安時代中・後期遺構、包含層出土土器
- 図版27 鎌倉時代大溝、井戸7出土土器
- 図版28 鎌倉時代遺構、包含層出土土器
- 図版29 鎌倉時代遺構、包含層出土土器

## 挿 図 目 次

第 1 図	長原遺跡周辺遺跡分布図	2
第 2 図	調査区位置図	5
第 3 図	座標変換式の求め方	6
第 4 図	層位模式図	8
第 5 図	自然流路1、2出土遺物	10
第 6 図	古墳時代遺構出土埴輪	11
第 7 図	自然流路3出土遺物	13
第 8 図	竪穴住居跡平面、断面図	14
第 9 図	古墳時代各遺構出土遺物	16
第 10 図	平安時代前期各遺構出土遺物	17
第 11 図	8区ピット1平面、断面図	19
第 12 図	8区地山直上の包含層、複乱層出土遺物	20
第 13 図	井戸1、2平面、断面図	21
第 14 図	井戸3平面、断面図	22
第 15 図	井戸4平面、断面図	23

第 16 図 平安時代中・後期各井戸出土遺物	24
第 17 図 土壇 1 平面、断面図	25
第 18 図 平安時代中・後期各遺構出土遺物	27
第 19 図 鎌倉時代大溝、井戸 7 出土遺物	29
第 20 図 井戸 7 平面、断面図	30
第 21 図 鎌倉時代各遺構、包含層出土遺物	31
第 22 図 10~12区鎌倉時代包含層出土遺物	32
第 23 図 1 区古墳時代遺構平面図	34
第 24 図 1 区鎌倉時代遺構平面図	35
第 25 図 2 区古墳時代遺構平面図	36
第 26 図 2 区鎌倉時代遺構平面図	37
第 27 図 4 区地山面遺構平面図	38
第 28 図 3 区古墳時代遺構平面図	39・40
第 29 図 5 区地山面遺構平面図	41
第 30 図 6 区地山面遺構平面図	42
第 31 図 7 区地山面遺構平面図	43・44
第 32 図 8 区地山面遺構平面図	45
第 33 図 9 区古墳時代遺構平面図	46
第 34 図 10 区古墳時代遺構平面図	47
第 35 図 10 区鎌倉時代遺構平面図	48
第 36 図 11 区古墳時代遺構平面図	49
第 37 図 11 区鎌倉時代遺構平面図	50
第 38 図 12 区古墳時代遺構平面図	51・52
第 39 図 12 区鎌倉時代遺構平面図	53・54

## 付 図

- 1 古墳時代遺構全体図
- 2 平安時代前期遺構全体図
- 3 平安時代中・後期、鎌倉時代遺構全体図

## 第Ⅰ章 遺 跡 の 環 境

長原遺跡は河内平野の南端部にあり、羽曳野丘陵といわれる洪積段丘北斜面が沖積地にもぐり込む場所に立地する。沖積地は1704年の大和川付替工事以前に遺跡の西を流れていた東除川が形成したものである。なお、今回の調査地は遺跡の南の縁辺部にあり、沖積地ではなく、段丘の北端に位置する。

本遺跡の周辺には数多くの遺跡があり、旧石器時代から近世に至るまでの各時代の著名な遺跡が存在する。その主なものを時代順に、ごく簡単にまとめてみる。

旧石器時代の遺跡としては、本遺跡において良好な旧石器の資料が得られており、また瓜破遺跡から国府型ナイフが出土している。八尾南、長吉川辺遺跡からも、わずかながら旧石器の出土がある。

縄文時代の遺跡としては、本遺跡で晩期の堅穴住居、溝、土壙、土器棺が検出されている。また八尾南遺跡からは後期の河道、晩期の溝、土壙が検出されている。縄文時代の遺構の確認はまだ少數だが、当地域における縄文時代の様相は徐々に明らかになっている。

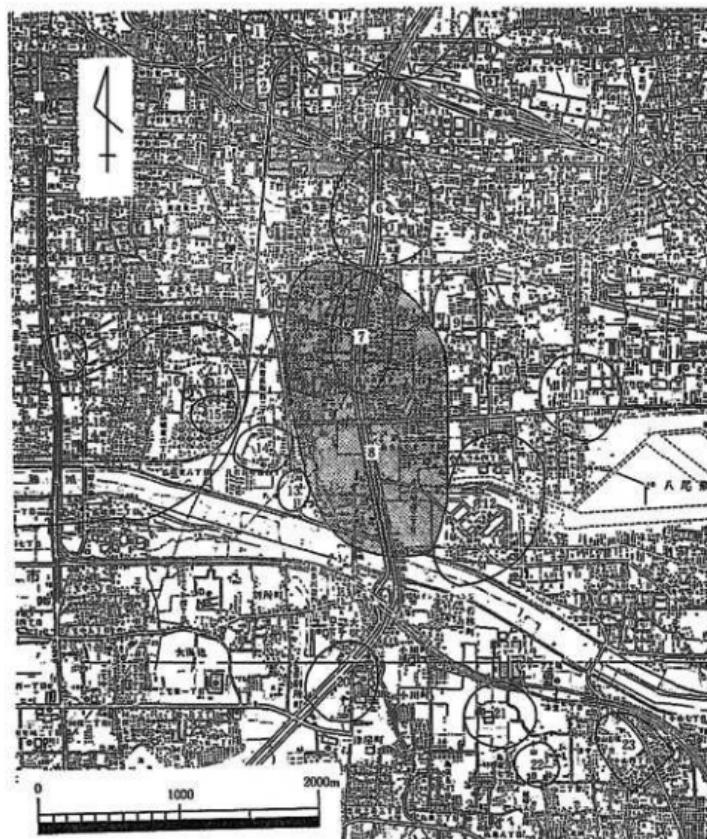
弥生時代になると遺跡数、規模が増大する。主に旧大和川水系が形成した自然堤防上に立地する。本遺跡以外に亀井、坂山、瓜破、八尾南遺跡があげられるが、とりわけ亀井遺跡は前期から後期まで連続する大遺跡で、最近方形周溝墓が多数発見され、注目されている。

古墳時代では、東南と南に2.5km離れた場所に、それぞれ津堂城山古墳、河内大塚山古墳がある。また、これまで空白となっていた平野低地部において近年の発掘調査に伴い、本遺跡を中心として小型方墳が多数見つかっている。水田跡等も確認されており、古墳時代の実態が明らかにされつつある。

奈良時代では、瓜破庵寺や大堀遺跡があげられる。大堀遺跡は最近の調査で、掘立柱建物群が検出され、当時の集落の一端をかいま見た。ところで、本遺跡周辺は整然と区画された条理制地割が残っている。

平安時代以降では、本遺跡を中心に平安～鎌倉時代の建物群が見つかっており、集落の様相が明らかになってきている。また最近の調査によって平安時代以降の資料が増加している。

以上のように、長原遺跡およびその周辺には、旧石器時代から連続と各時代の遺跡、遺構が存在していることがわかる。また本遺跡のみならず亀井、瓜破、八尾南等の複合遺跡が多く、大阪府下でも有数の遺跡地帯ということができる。



- |            |            |           |
|------------|------------|-----------|
| 1. 長栄寺廃寺   | 2. 輔相院寺    | 3. 加美遺跡   |
| 4. 久宝寺遺跡   | 5. 亀井北遺跡   | 6. 亀井遺跡   |
| 7. 城山遺跡    | 8. 長原遺跡    | 9. 城山古墳群  |
| 10. 六反古墳群  | 11. 木の本遺跡  | 12. 八尾南遺跡 |
| 13. 長吉田遺跡  | 14. 長吉野山遺跡 | 15. 玄岐庭寺  |
| 16. ゴマ堂山古墳 | 17. 花園山古墳  | 18. 玄破遺跡  |
| 19. 玄破北遺跡  | 20. 大堀遺跡   | 21. 津堂遺跡  |
| 22. 小山遺跡   | 23. 津堂城山古墳 |           |

第1図 長原遺跡周辺遺跡分布図

## 第Ⅱ章 調査に至る経過及び調査の方法

### 第1節 調査に至る経過

長原遺跡は、大阪市平野区長吉長原及び長吉川辺一帯に所在する先土器時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。当該遺跡は、昭和49年、大阪市交通局が事業主体となった地下鉄2号線の建設に先立って、財団法人大阪文化財センターが実施した試掘調査によって発見されたものである。

その後、地下鉄用地部分にかかる発掘調査は、昭和49年から、大阪市教育委員会を中心となつて組織した長原遺跡調査会によって実施され、塚の本古墳（4世紀）や、大小の方墳群からなる長原古墳群（5世紀末～6世紀初）、水田跡（6世紀後半）、掘立柱建物群と井戸群（平安末～鎌倉）等々の遺構が検出され、大きな学問的成果を収めると共に、瓜破遺跡以外、不明な点の多かった大阪市東南部の重要性が明らかとなった。さらに引続いて八尾南駅の駅舎部分や車輶基地部分の調査も長原遺跡調査会と新たに八尾市教育委員会が組織した八尾南遺跡調査会によって実施され、先土器時代の遺物や、绳文晩期、弥生時代の遺構や遺物が検出された。特に绳文晩期の土器については、突唇文土器を代表する船橋式土器よりもさらに新しい様相を呈するものとして、長原式と呼ばれる縦年に重要な土器として注目され、長原遺跡は、その指標となる遺跡として全国的に注目を集めに至っている。

くたって、昭和51年からは、近畿自動車道天理～吹田線にかかる当該遺跡の発掘調査が実施された。当該調査の実施については、地下鉄谷町線関連の試掘調査の結果を踏まえて、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局の間で、昭和50年度中、その方法についての協議がなされた。協議の内容は、公団道路敷地の全面発掘及び、将来全線（当時は13遺跡）の調査が実施された段階で出土しているであろうと予想される膨大な量の遺物の整理及び収蔵施設を含む保管管理体制の事前の合意を前提とする大阪府教育委員会と、あくまでも橋脚予定位置に限定した調査を主張し、出土する遺物については、その権利を放棄することを前提にして、遺物整理費の負担のみにとどめたいとする日本道路公団との間で、お互いの主張が空軒し、容易に妥協点を見い出し得ないまま、時間のみが経過していった。

一方、日本道路公団との上記の協議を進めながら、大阪府教育委員会では発掘調査体制を整える必要にせまられ、府教委独自で組織を作るべきか、財団法人大阪文化財センターの協力を得て実施するべきか、内部的に大きな選択をせまられ、種々の懇論、交渉、協議を重ねた結果、後者に調査の協力を依頼することを決定した。

こうして、調査体制が確定したことから、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局は、新たに財団法人大阪文化財センターを加えて、調査の実施について協議を再開した。その結果、基

本的には発掘調査の結果を尊重し、設計変更や工法変更をも含む検討を加えながら橋脚位置を決定すること、将来的に見た遺物収蔵庫並びに遺物整理事業については、概要が把握された段階で誠意をもって協議すること、を前提として合意した。この合意に基づいて、日本道路公団は文化庁へ、文化財保護法に基づく協議文書を提出し、文化庁からは事前の発掘調査の徹底と、遺構の保存に十分配慮するべき旨回答がなされた。この文化庁からの回答を待って、大阪府教育委員会と日本道路公団並びに財団法人大阪文化財センターは、各々の組織の役割分担を明確化し、調査の円滑な実施を旨とする協定を昭和51年4月7日付で締結し、続いて昭和51年7月26日付で長原遺跡発掘調査について前記協定に基づく受委託契約を締結し、現地調査に着手した。

この長原遺跡の発掘調査は、橋脚予定位置に限定された調査であったが、古墳群の発見や、掘立柱建物群の発見により、文化庁の回答の精神を踏まえて保存策が講じられ、次にわたる設計変更と、それに伴う契約変更を重ねると共に、地下鉄谷町線開通の試掘調査範囲より南の部分にも遺跡が存在することが明らかとなり、合せて調査範囲の拡大に伴う契約変更をも含んで、昭和53年3月に終了し、同年5月、概要報告書『長原』を刊行して終了した。

しかし、上記発掘調査時には、範囲が拡大した南半部～大和川右岸では、既に完了していた第1明治橋が、環境問題の調整の遅れから供用出来ず、府道中央環状線南行（柳方面）が、本来近畿自動車道天理～吹田線Aライン（松原行）として供用されるべき第2明治橋に迂回していた。従って、迂回路部分については、上記の調査には含めず、将来の第1明治橋の供用を待って調査を実施することとなっていた。

昭和58年4月になって、満5年を経過した環境問題の調整が、バッファゾーンの設置、植樹帯の拡充、防音壁の完全設置、生活関連道路の確保等々の合意の上に成立し、第1明治橋が中央環状線南行として供用された。この切替工事が完了した後、日本道路公団は旧中央環状線道路及び路床の撤去を行ない埋蔵文化財発掘調査が可能な条件を整えて、大阪府教育委員会に調査方、依頼をした。依頼を受けた大阪府教育委員会は橋脚部分13ヶ所の調査を実施することを決定し、財団法人大阪文化財センター、日本道路公団大阪建設局との間で昭和58年10月27日付で受委託契約を締結し、現地調査に着手した。

調査は順調に進捗し、昭和59年8月31日現地における発掘調査を終了した。

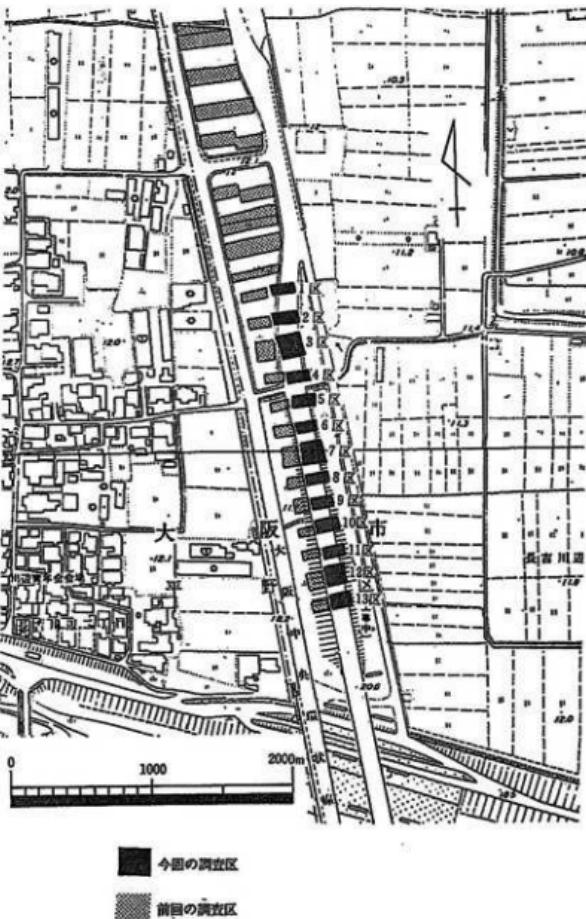
## 第2節 調査の方法

今回の調査は、高速道路の橋脚部分13ヶ所を対象としたもので、北から1区、2区、3区……13区と表した。1～13区のそれぞれは、1976～78年に実施された前回の調査におけるNo28～40トレンチのそれぞれの東に隣接する。

ところで測量基準となる座標であるが、前回の調査では、「すでに長原遺跡調査会によって行われた地下鉄谷町線

延長に伴う調査によって設定された基準線を使用した」(『長原』大阪文化財センター1978)とある。

しかし、この時の基準となったポイントは、もはや現存せず、座標の復元是不可能であった。また、長原遺跡調査会を継承した大阪市文化財協会が刊行した『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』(1982.3)に、「当座の用を足すためだけに、測量基準は地下鉄工事のそれが採用されたに過ぎなかった。これが充分に批判し、克服されないまま、財団法人大阪文化財センターが刊行した『長原』に継承された。從前の測量基準は破棄し、自今以後



第2図 調査区位置図

は測量法の規定に基づいて国土地理院が実施している公共測量に準ずべきことを提起しておきたい。」とある。そこで今回の調査は、国土座標系による基準線を使用することにした。すなわち1~13区の実測に使用した座標は、それに隣接するNo.28~40トレンチの実測に使用した座標と異なるものとなったわけである。

発掘調査終了後、前回の座標を、今回の国土座標に変換する方法を調べてみたところ、1978年3月に実施された航空測量の基準点の一つであるD-0が(W10, S330)であり、このポイントが、国土座標( $x = -155,692.584$   $y = -38,771.035$ )に相当し、またA-0とM-0を結ぶ直線が、D-0を通り、それがW10ラインを表わし、国土座標から $349^{\circ}20'55''$ 振った角度であることをようやく捜しあてた。

下記のような計算式によって電車で計算したところ、前回の座標原点(W0, S0)は国土座標( $x = -155,366.42$ ,  $y = -38,822.02$ )であることが判明した。

$$-155,692.584 + \sqrt{330^2 + 10^2} \times \cos(10^{\circ}39'05'' - \text{arc tan} \frac{10}{330}) = -155,366.42$$

$$-38,771.035 - \sqrt{330^2 + 10^2} \times \sin(10^{\circ}39'05'' - \text{arc tan} \frac{10}{330}) = -38,822.02$$

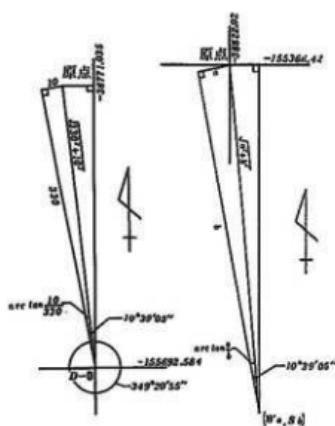
(=単位を四捨五入、以下同じ)

次に(wa, sb)を国土座標に変換する計算式を下記のように作成した。

$$x = -155,366.42 - \sqrt{a^2 + b^2} \times \cos(10^{\circ}39'05'' - \text{arc tan} \frac{a}{b})$$

$$y = -38,822.02 + \sqrt{a^2 + b^2} \times \sin(10^{\circ}39'05'' - \text{arc tan} \frac{a}{b})$$

(ただし  $a > 0$   $b > 0$   
 $a + \tan 10^{\circ}39'05'' < b$  の場合)



第3図 座標変換式の求め方

この計算式によって(W30, S530)(W30, S570)(W30, S640)(W30, S715)(W30, S750)の各点の国土座標値を求めていくと——なお  $30 + \tan 10^{\circ}39'05'' = 159.5122$  で、上記計算式の条件を満たす——それぞれ( $x = -155,892.83$ ,  $y = -38,753.540$ ) ( $x = -155,932.14$ ,  $y = -38,746.15$ ) ( $x = -156,000.94$ ,  $y = -38,733.21$ ) ( $x = -156,074.65$ ,  $y = -38,719.35$ ) ( $x = -156,109.04$ ,  $y = -38,712.88$ ) という数値を得た。

以上の計算により、No.28~40トレンチの正確な位置を確定することができた。(付図2)

## 第Ⅲ章 調査成果の概要

### 第1節 基本層位

層位については、1～3区、4～9区、10～13区の3つのブロックに分けて説明する。

#### 1～3区（第4図）

1層 明黄色粗砂礫土。中央県道建設工事に関連する盛土である。2区の東半部および3区の大半は、同工事の際に2～6層が削平され、この土層が置換されている。

2層 近年までの耕作土である。

3層 黄灰色微砂。2層に伴う床土である。

4層 灰褐色砂質土。中世の遺物を少なからず含む。

5層 暗灰褐色砂質土。中世の遺物を多く含む。時期は、13世紀のものがほとんどである。この層を除去すると、中世造構面となり、建物跡等の造構を検出した。造構面のレベルはT.P.+10.4mである。

6層 灰黄色砂、シルト、黒色粘土互層。古墳時代自然流路に相当する層で、ラミナが認められる。6'層は、自然流路が地山を抉ったところに黒色粘土がたまつものである。

7層 青灰色細砂。古墳時代水田面を覆う層で、ラミナが認められる。層厚は15～30cmである。

8層 黒灰色粘土。古墳時代水田耕作土で、層厚15～20cmである。

9層 青灰色砂礫、黒色粘土互層。古墳時代の自然流路である。

10層 薄緑灰色砂礫土～明灰色砂質土。地山である。地山面のレベルは、1区でT.P.+9.3m、2区同9.7m、3区同10.0mである。

#### 4～9区

中轍建設時に地盤改良工事がなされたようで、地山まで削平され、盛土されている。盛土、擾乱土を除去すると、地山の明黄褐色土があらわれ、同工事に伴う土木機械のキャタピラ痕が多数検出される。地山面直上の擾乱土層には、古墳時代～中世の遺物を多く含む。遺構検出面（地山面）のレベルは、T.P.+10.3～10.8mで、南へ行く程高くなっている。

#### 10～13区（第4図）

4～9区と同様に地盤改良工事がなされたのであるが、削平は、耕作土、床土までであり、中世の造構面には達していない。

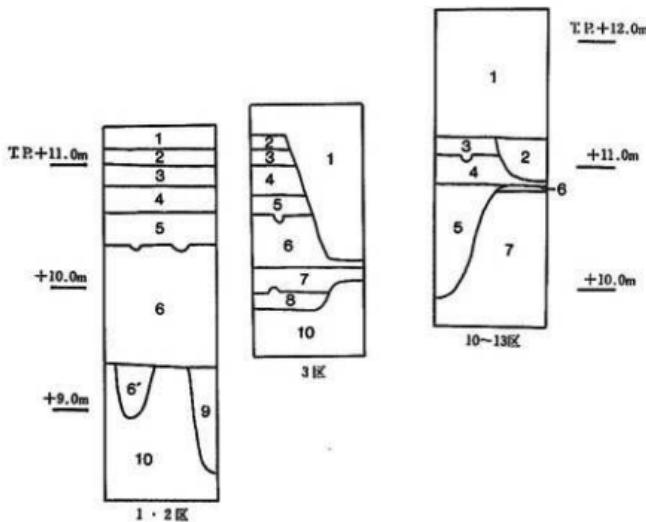
1層 明黄褐色砂礫土。盛土である。

2層 黒色ヘドロ。近年の農業用水路である。

3層 灰灰色粘質シルト。中世の包含層で、6～13世紀の土器を含む。この層を除去する

と中世の邊境面となる。邊境面のレベルはT.P.+10.9~11.1mである。

- 4層 黄褐色粘土。須恵器、土師器片を含む。
- 5層 青灰色砂、砾、黒色粘土瓦層。古墳時代の自然流路である。弥生、古墳時代の遺物を含む。
- 6層 茶褐色粘土。古墳時代自然流路の肩に堆積しているもので、土師器片が出土した。
- 7層 明黄褐色土。地山である。地山面のレベルはT.P.+11.0~11.2mで、南へ行く程高くなっている。



第4図 層位模式図

## 第2節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、自然流路、堅穴住居跡、溝、ピット、水田跡、落ち込みを検出した。その埋土は、自然流路を除いて基本的に茶褐色土である。(付図1)

### 自然流路1 (第5・25図、図版2・16・17・18)

2区の東半において自然流路の西肩部を検出した。東肩部は調査区外となり、縁は明らかでない。流路は深さ1.3mで、底のレベルはT.P.+8.3mを測る。埋土は大雜把に3層に分けられる。下層は暗灰褐色砂、中層は黒色粘土、上層は白黄色砂である。この流路の埋土は、9、10、11区で検出された自然流路3の埋土と似ていることから、同一流路の可能性がある。

出土遺物は、下層から出土するものはわずかであり、主に中層、上層から土師器、須恵器が得られた。埴輪の出土は少なかった。(1~6)は中層から、(7~9)は上層から出土したものである。

(1、2)は土師器の甕で、布留式と言われるものである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は内に厚くして、稜線をつくっている。口径は(1)で14.5cm、(2)で16.0cmを測る。(3)は土師器の小皿である。内部および外面の上半をナデ調整している。復元口径9.6cmである。(4~6)は須恵器である。(4)は环身の立ち上がり部であるが、ひずみがひどく、口径は復元できない。(5)は捉瓶で完形である。口径6.6cm、体部径13.5×8.2cm、器高15.5cmを測る。体部の肩に口頸部を継ぎ足す時の接合痕が見られる。(6)は壺の口頸部で、復元口径20.4cm。(7)は土師器の小型高杯で、手づくね製とみられる。口径5.4cm、脚径4.1cm、器高5.0cm。(8)は須恵器環身で、復元口径14.5cm。(9)は須恵器高杯である。

### 自然流路2 (第5・6・23・25図、図版2・16・17・18・20・21)

自然流路1の西岸の地山面はT.P.+9.2~9.5mの平坦な面で、1、2区においてはその上に1.0~1.5mの砂、粘土瓦層が堆積している。砂にはタミナが見られることから、水が流れていったことは明らかである。この砂、粘土瓦層は、2区の東端において、自然流路1の上層に切られている。また、この層の堆積以前に流路の水は、時に激しく流れて地山面を下刻することがあったものと思われ、1区では径8.5m、深さ1.0mの円形状の落ち込み、2区では南北に走る溝状のものが2本検出された。埋土はともに黒色粘土である。隣接するNo.28、29トレンチで流路Bが検出されており、自然流路2は、この流路Bの一部と思われる。

出土遺物は1区円形状落ち込みから、土師器、須恵器等が出土した。図化しえるものは須恵器のみである。

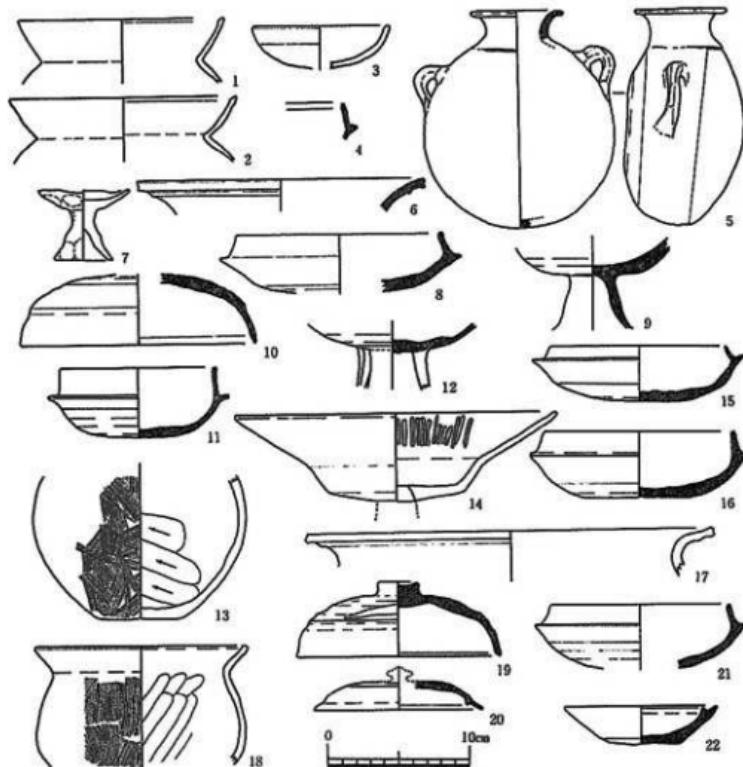
(10)は环蓋で、復元口径16.7cm。(11)は环身で、立ち上がりがほほまっすぐにのびる。復元口径11.1cm。(12)は高杯で、脚に長方形のスカシが三方向に設けられている。

砂、粘土瓦層からは、土師器、須恵器、埴輪が出土している。特に中層の黒色粘土層からは、豊富な出土を見た。

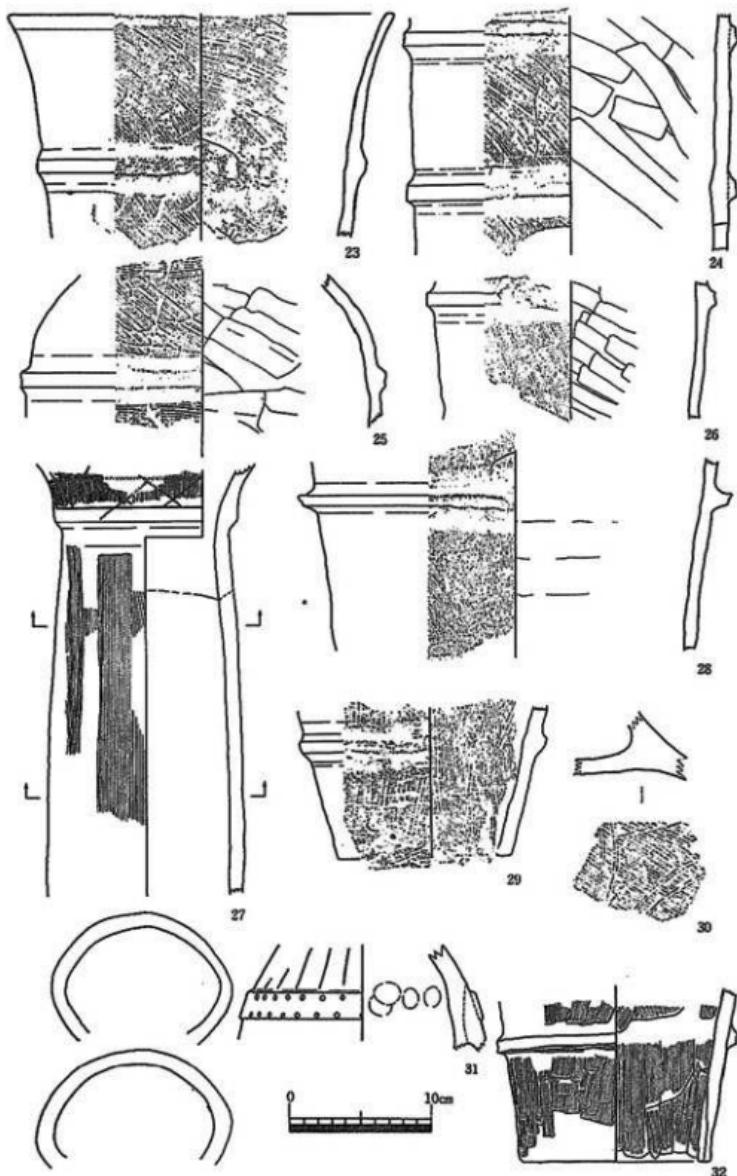
(13) は土師器の甕の体部下半であるが、底が平たい。外面は刷毛目、内面はヘラ削りである。  
 (14) は土師器の高环で、内面上半部に放射状の暗文が施されている。(15、16) は須恵器の环身で、口径、器高はそれぞれ12.4、4.0cm、13.4、4.7cmを測る。(17) は土師器の甕口縁部で、復元口径28.4cmである。(25) は朝顔形埴輪。(27) は形象埴輪であるが、動物の脚とするには大きすぎ、大刀ではないかと思われる。(28) は円筒埴輪であるが、外面に赤色顔料が塗付されている。

砂、粘土瓦層では、砂層中からも土師器、須恵器、埴輪が出土している。

(18) は土師器の甕で、口縁端部が内へ肥厚している。(19、20) は須恵器环蓋。(21、22) は須恵器环身である。出土遺物に相当な時期差がある。(23、24、26、29) は円筒埴輪である。すべて黒斑をもたない。(24) には外面に赤色顔料の痕跡が認められた。



第5図 自然流路1、2出土遺物



第6図 古墳時代遺構出土埴輪

自然流路3 (第6・7・33・34・36図、図版4・5・16・17・19・20・21)

9、10、11区において検出された。流路は11区で、南東から流れるもの(流路3の1)と南北から流れるもの(流路3の2)とが合流し、10区で幅9.5~11.0m、深さ1.8~2.0mとなり、9区でその東端を流れ、8区以北では調査区外を流れる。流路3の2は、No.38、39、40トレンチにおいて検出された流路Cに相当するものである。

流路3の1は幅8.0m、深さ1.4mを測り、2段掘り状を呈する。流路3の2はその東側しか検出しなかったが、No.38トレンチでは西肩を検出しておらず、流路幅は12.0mを測ることができた。川底のレベルは9、10、11区の北端でそれぞれT.P.+8.7、8.9、9.0mである。

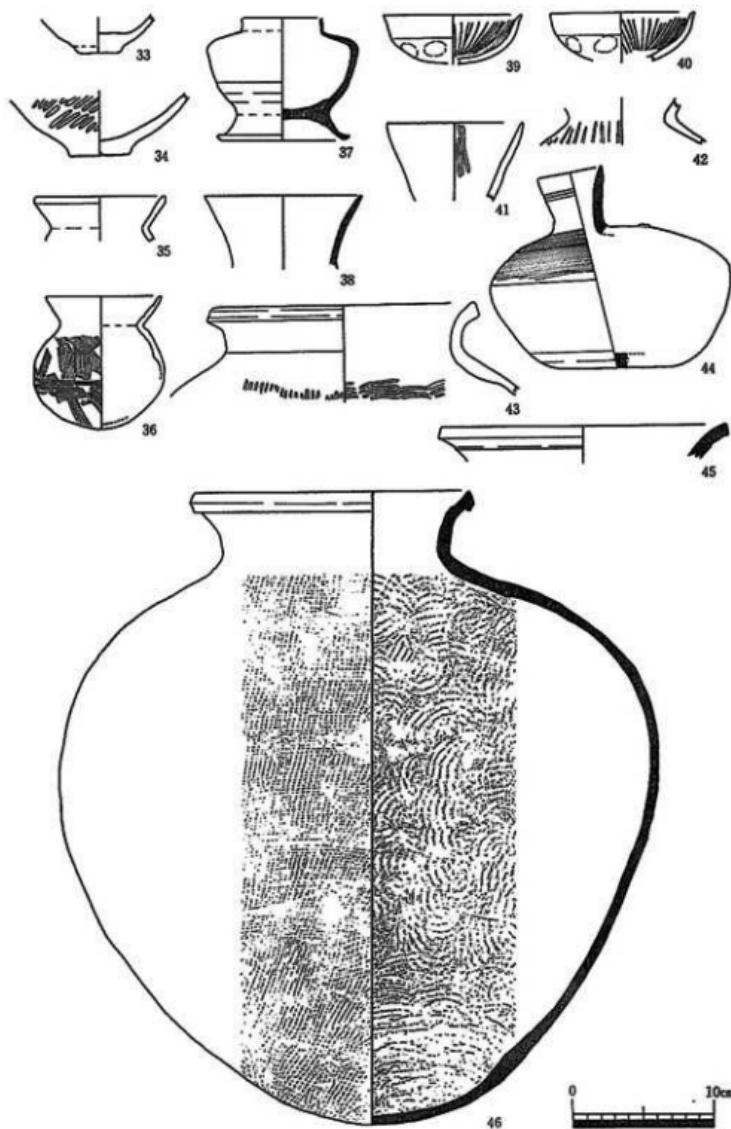
埋土は基本的に3層に分かれる。下層は黒灰色礫砂層、中層は黒色粘土で植物遺体を多く含む。上層は黄褐色あるいは青灰色砂層で、ヲミナが認められる。

出土遺物としては、下層からY様式の弥生式土器が出土している。(33、34)は壺の底部で、ひとつにはタタキ目をもつ。下層からは他に土師器片が出土した。

中層からは土師器、須恵器、埴輪が出土した。(32)は円筒埴輪の底部で、外面刷毛目調整の後にタガをついている。(35)は土師器の壺の口頭部で、復元口径9.2cm。(36)は完形の土師器小型丸底壺。体部外面に刷毛目調整を施し、内湾しつつ立ちあがる口縁部の内面に2条の凹線状のものがある。口径8.2cm、器高9.5cm。(37)は須恵器の台付短頸壺である。復元口径5.4cm、器高8.6cm。(38)は須恵器で長頸壺の口縁部とみられる。内面に自然釉がかかる。復元口径11.0cm。(46)は須恵器の大型の壺で、体部内面は同心円状、外面は平行タタキを施す。口径19.5cm、器高44.7cm。

上層からは土師器、須恵器、埴輪が出土した。(31)は形象埴輪で、小札鉢留の舟を表現している。破片であるため、街角付舟か眉庇付舟かは不明である。(39、40)は土師器の壺で内面に放射状の暗文が施されている。復元口径はそれぞれ9.7cm、10.2cm。(41)は土師器で壺の口縁部とみられる。摩滅が激しいものであるが、内面に縱方向のミガキがあるようである。復元口径9.7cm。(42)は土師器で壺の頭肩部とみられる。肩部外面に縱方向の暗文状の模様がみられる。(43)は須恵器の壺で、外反する口縁部は端部で肥厚する。体部外面は平行タタキ、内面は円弧状のタタキがある。復元口径18.3cm。(44)は完形の須恵器平瓶である。把手は、ボタン状のものを貼付けて表現している。体部は外面の上半にカキメを施す。口径4.6cm、器高14.2cm。(45)は須恵器の壺の口縁部である。復元口径20.0cm。

出土遺物から推察すると、自然流路3は弥生時代後期以後に流れ始め、激しく地山を下削した後、6世紀ぐらいまではゆっくりとした流れとなってヘドロ状のものがたまっていき、それ以降7世紀ぐらいまでは底の浅い流れで砂を堆積し、7世紀以降に埋もれ切って周囲と変わらない高さとなったものと考える。

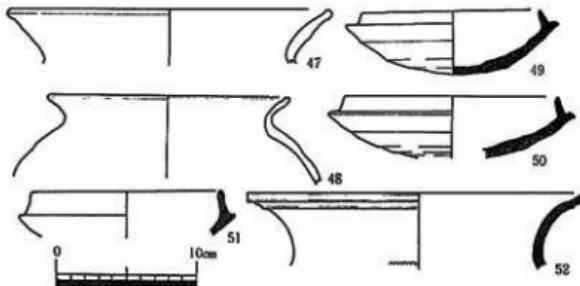


第7図 自然流路3出土遺物

色微砂に遺物がなく、その時期は決めがたいが、同微砂が前述の自然流路に由来するものと考えるなら 6 世紀からあるいはそれ以降であろう。

落ち込み（第38図、図版 5）

12区で検出されたもので、3 本の溝が伴う。埋土は上層が黄色灰色粘土シルトブロック土、中層が暗灰色粘土、下層が黄灰色微砂である。中層から須恵質の円筒埴輪片が出土した。遺構は形状から人工のものとは考えがたく、流路 3 に伴う自然の落ち込みと考えられる。



第 9 図 古墳時代各遺構出土遺物

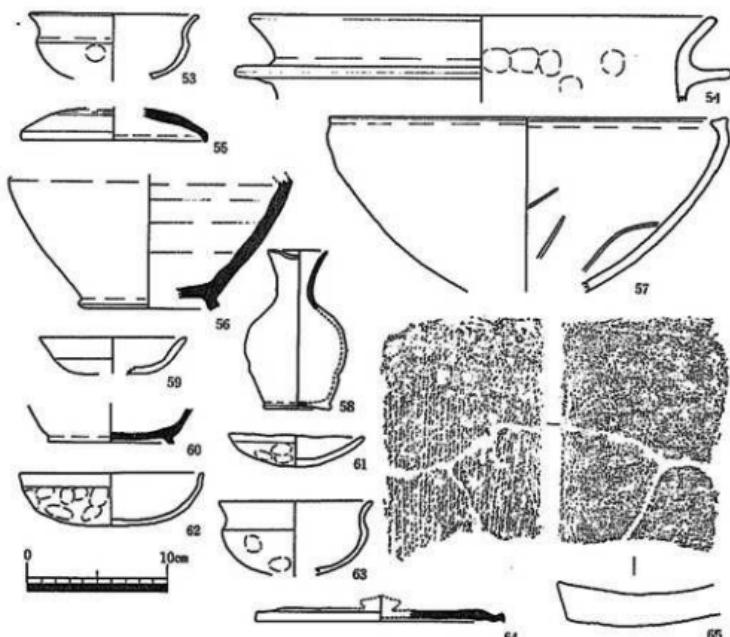
### 第3節 平安時代前期の遺構と遺物

この時期のものと考えられる遺構として、自然流路、掘立柱建物、ピット列、ピットを検出した。遺構は、4、5、6、7、8区に限られている。また、8区の地山直上の包含層、擾乱土層中より、この時期の遺物が多く出土している。遺構の埋土は、自然流路を除いて基本的に灰色～黄灰色砂である。(付図2)

#### 自然流路4 (第10・27図、図版6・22・23)

4区において南西から北東に向けて流れるもので、3区南東隅でもその西肩を検出した。幅3.0~4.0m、底の幅0.1~0.2m、深さ1.5mで、埋土はこぶし大の石を多く含む漂粗砂である。流路は、激しい流れで下刻されたもので、渓谷状を呈している。これはNo32トレンチで検出された流路の続きにあたるものであるが、出土遺物がなく、時期不明のものとなっていた。しかし、今回の調査では、8世紀後半～10世紀前半の遺物の出土を見た。

(53)は土師器の环で、口縁部が外反する。復元口径11.0cm。(54)は土師器の羽蓋で、口縁部が外反し、端部を丸くおさめている。復元口径32.6cm、同鉢径35.3cmを測る。(55)は須恵器の



第10図 平安時代前期各遺構出土遺物

壺蓋である。復元口径13.0cm。(56)は須恵器で、おそらく長頸壺になるものと思われる。(57)は土師器で、鉄鉢形土器といわれるものである。内面に暗文がみられる。復元口径26.4cm。(58)は須恵器の瓶子で、完形で出土した。口縁部に片口をつくる。底部に回転糸切り痕が残っている。口径4.2cm、器高11.4cm。

なお(57、58)は流路埋土最上層より出土した。(58)が、この流路の時期の下限を示すものとなろう。

#### 掘立柱建物1 (第10・29図、図版6)

5区西半部で検出されたもので、東西3間(8.5m)南北2間(4.6m)の建物である。柱間寸法はそれぞれ2.8m、2.3mとなる。東西が3間と判断したのはNo.32トレーナーでこれに続くようなピットが認められないからである。建物の南北方向はN-2°-Eを測る。柱穴は0.6~0.8mぐらいの不定形のものが多く、深さは0.1~0.3mである。埋土は暗黄色ないし黄灰色砂で、柱痕は見あたらない。土師器、須恵器の細片が出土しているが、固化しうるものは、(59)だけである。

(59)は土師器の小皿で、摩滅が激しく、調整は不明である。復元口径10.3cm。

#### 掘立柱建物2 (第10・31図、図版7・8・22)

7区南部で検出されたもので、東西2間(4.4m)南北2間(4.2m)以上の建物である。柱間寸法はそれぞれ2.2m、2.1mとなる。建物の南北方向はN-3°-Eである。柱穴は0.5~0.6mの方形あるいは不定形で、深さ0.1~0.2m。埋土は灰色ないし黄灰色砂である。柱痕は見あたらなかつたが、柱穴の1つに平瓦(65)を底におき、礎板として使用しているものがある。

遺物としては平瓦以外に、時期のわからない土師器細片をわずかに出土した。

#### ピット列 (第30図、図版7)

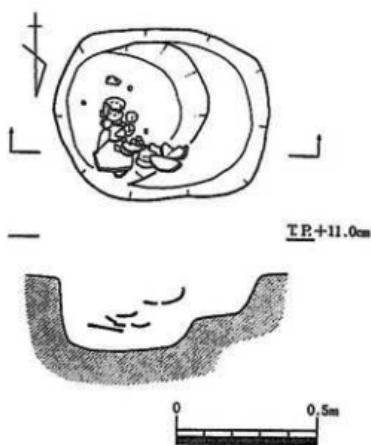
6区で東西の一一直線上に位置する5つのピットを検出した。西の3つが約1.8m間隔に並び、約7mおいて2つのピットが3.7mの間隔に位置している。すなわち、とんでいるものもあるが、1間を1.8m前後とする位置にピットが一直線に並んでいる。西の3つのピットは一辺0.3~0.5mの方形で、深さ0.15~0.2m、東の2つのピットは0.6×1.0m、深さ0.15mである。埋土は灰色砂で、出土遺物はなかった。

ピット列は一つの造構とみることができるし、また西の3つのピットと東の2つのピットとは別の造構のものと考えることもできる。いずれにしても掘立柱建物か、柵列の一部にならうと思われる。方向はN-88°-Wである。

#### ピット (第10・11・32図、図版9・22・23)

8区でこの時期のピットを2つ検出した。ピット1は0.6×0.7m深さ0.25mで、段掘り状のものである。埋土は灰色砂で、土師器、須恵器がまとまって出土した(61~64)。ピット2は1.5×0.7m深さ0.15mのもので、出土遺物はなかった。

(61)は、土師器の小皿で完形に近い。摩滅はげしく調整は不明である。口径9.4cm、器高2.2cm。(62)は土師器の壺で、摩滅がはげしい。口径13.0cm、器高3.7cm。(63)も土師器の壺で、



第11図 8区ピット1平面、断面図

8区地山直上の包含層、擾乱層出土遺物（第12図、図版22・23）  
4～9区では中環建設時に地山まで削平されてしまっていたが、一部に地山直上の包含層が残る地区もあった。しかし、この包含層も工事に伴う土木機械のキャビリティにより押圧擾乱されていた。8区においては、この包含層、擾乱層中より、平安時代前期を中心とする遺物が多く出土した。

(66～74)は土師器壺。(75～78)は土師器皿。(79)は土師器壺の底部で、断面三角形の高台が付されている。(80)は土師器の壺になろう。口縁部端は強くつまみ出され、内外面に稜線をもつ。(81)は内面が黒い黒色土器。(82)は内外面とも黒い黒色土器。(83、84)は土師器の壺。(85)は須恵器壺蓋。(86、87)は須恵器の壺の底部で高台が付く。(88)は須恵器で底部に回転糸切痕が残る。(89～91)は土師器壺の口頸部。(92)も土師器壺である。

口縁部が外反する。復元口径10.7cm。(64)は、須恵器壺蓋で、復元口径17.5cm。

この二つのピットは掘立柱建物2の南の延長線上に位置し、両ピットを結ぶ線の方向は、同建物の東西方向と一致する。建物2の南辺であることが考えられるが、そうすると建物の南北の長さは13.6mとなり、6間半という半端な数を得る。両ピットが建物2に関連あることは確かだが、建物2の一部とみるとには、さらに検討する必要があろう。

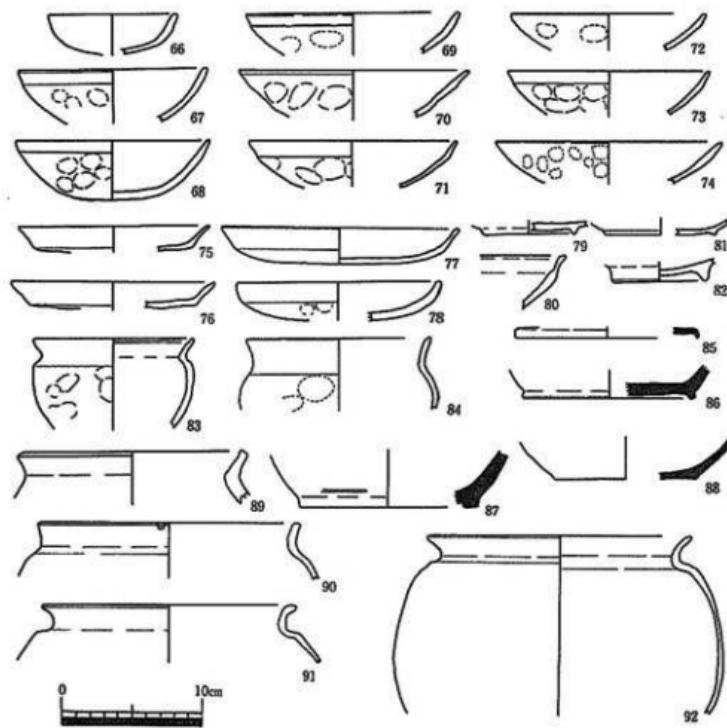
この時期のピットは5区北東部においても2つ検出した。須恵器(60)が出土している。

ところで前回の調査において、No.33レンチ南部中央に3つのピットが等間隔に並んで検出

#### 8区地山直上の包含層、擾乱層出土遺物（第12図、図版22・23）

4～9区では中環建設時に地山まで削平されてしまっていたが、一部に地山直上の包含層が残る地区もあった。しかし、この包含層も工事に伴う土木機械のキャビリティにより押圧擾乱されていた。8区においては、この包含層、擾乱層中より、平安時代前期を中心とする遺物が多く出土した。

(66～74)は土師器壺。(75～78)は土師器皿。(79)は土師器壺の底部で、断面三角形の高台が付されている。(80)は土師器の壺になろう。口縁部端は強くつまみ出され、内外面に稜線をもつ。(81)は内面が黒い黒色土器。(82)は内外面とも黒い黒色土器。(83、84)は土師器の壺。(85)は須恵器壺蓋。(86、87)は須恵器の壺の底部で高台が付く。(88)は須恵器で底部に回転糸切痕が残る。(89～91)は土師器壺の口頸部。(92)も土師器壺である。



第12図 8区地山道上の包含層、擾乱層出土遺物

## 第4節 平安時代中・後期の遺構と遺物

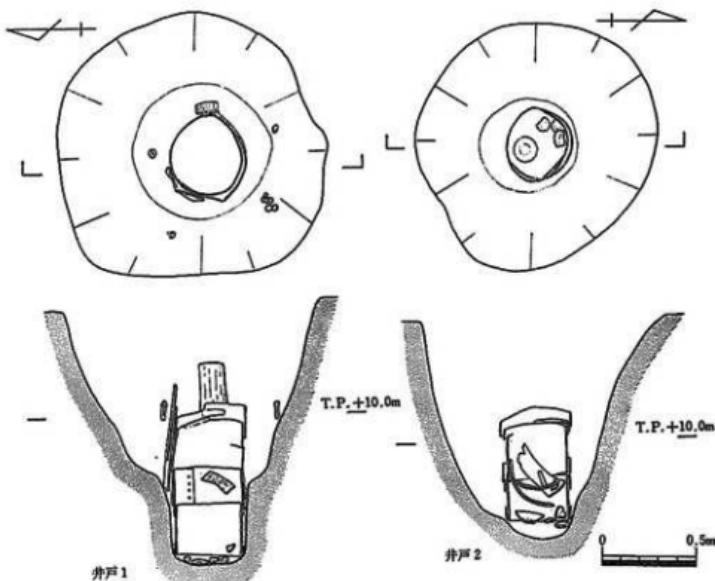
この時期の遺構としては、掘立柱建物、井戸、土壙、溝、ピットを検出した。遺構は5、6、7、8区に限られる。遺構の埋土は基本的に2cm前後の礫を含む黒色砂土である。(付図3)

### 掘立柱建物3 (第31図、図版7・8)

7区南西部で検出されたもので、No.34トレンチの南東部にある2つのピットが、この建物に伴うものであることが判明した。建物の規模は東西2間(4.0m)、南北4間(7.9m)以上で、柱間はどちらも2.0mである。建物の方向はN-5°-Eである。柱穴は径0.3m、深さ0.3~0.35mのもので、南の2個からは柱痕が出土した。柱痕以外に遺物の出土はほとんどなく、時期は決めがたい。しかし、この建物跡付近の包含層、擾乱層からは、平安時代の後期の土器が多く出土しており、この時期のものと考えたい。

### 井戸1 (第13・16・29図、図版6・10・24)

5区に所在する。掘方の径1.4m、同底部の径0.4m、深さ1.4mを測る。井筒は曲物で、4段残存していた。井筒を補強するため、板を曲物の外に添えている。また掘方内上部で、井筒から0.1~0.2m離れた所で4ヶ所に竹を打ち込んでいる。このように竹を打ち込む例は、No.34トレン



第13図 井戸1、2平面、断面図

チのS E 113にも見られる。井戸の底には4~5cm大の礫が認められた。

掘方内からは遺物はほとんど出土せず、井戸内から瓦器碗、土師器羽釜、小皿、陶器が出土した。いずれも破片であった。

(93) は上層から出土した土師器羽釜で、口径は復元してみると24.1cmであったが、もう少し大きくなるかもしれない。外面に焼が付着している。(94、95) は瓦器碗で、それぞれ中層、最下層から出土した。復元口径15.0cm、14.8cm。(96) は最下層から出土した土師器小皿である。

復元口径10.0cm。

#### 井戸 2 (第13・16・29図、図版6・10・24・25)

井戸1から西に約3m離れた所にある。掘方の径1.3m、同底部の径0.5m、深さ1.2mを測る。井筒は曲物で、3段我存していた。井戸内の埋土を最下段の曲物の上部付近まで除去すると、曲物の破片が多く見い出した。さらにそれらを除去すると井戸の最下層となり、完形の瓦器碗、瓦器小皿が検出された。おそらく井戸築造時の祭祀に伴うものと思われる。

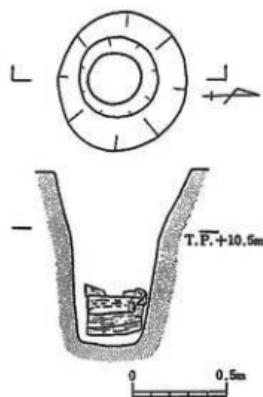
遺物は掘方内から土師器、須恵器、黒色土器、瓦器の小細片が出土した。固化し得るものはない。井戸内では最下層からの出土遺物が多い。前述の完形品以外に土師器皿、羽釜等が出土している。(97~100) は上～中層、(101~107) は最下層のものである。

(97) は完形の土師器小皿で、形状はいびつである。口縁部を外に折り返して、さらに端部を内へつまみだしている。口径8.9cm、器高1.7cm。(98~100) は瓦器碗である。(101~103) は土師器小皿で、いずれも口縁部を少し外に折り返している。復元口径9.8、10.5、10.0cm。(104) は土師器皿で、口縁部の折り返しがない。復元口径16.4cm。(105) は瓦器碗で、内外面とも密だが不ぞろいなミガキ調整を施している。復元口径16.2cm、同器高6.0cm。(106) は完形の瓦器碗で、端正なつくりであるが、口縁の高さがいびつである。口径15.5cm、器高5.9~6.7cm。(107) は完形の瓦器小皿で、外面の上半は横方向の、下半は縱方向のミガキを施す。口径10.6cm、器高2.6cm。

#### 井戸 3 (第14・16・30図、図版7・13・24)

6区中央に所在する。掘方の径0.7m、同底部の径0.35m、深さ0.9mを測る。井筒は曲物で2段我存していた。上段の方は遺存状態が悪い。井戸内より土師器、黒色土器、鐵器が出土した。瓦器の出土はなかった。今回の調査では、最古の井戸となろう。

(108) は土師器小皿で、口縁部を外に折り返している。復元口径9.5cm。(109、110) は黒色土器の碗である。復元口径11.7cm。(111) は土師器甕で、体部外面に指圧痕がある。復元口径17.0cm。

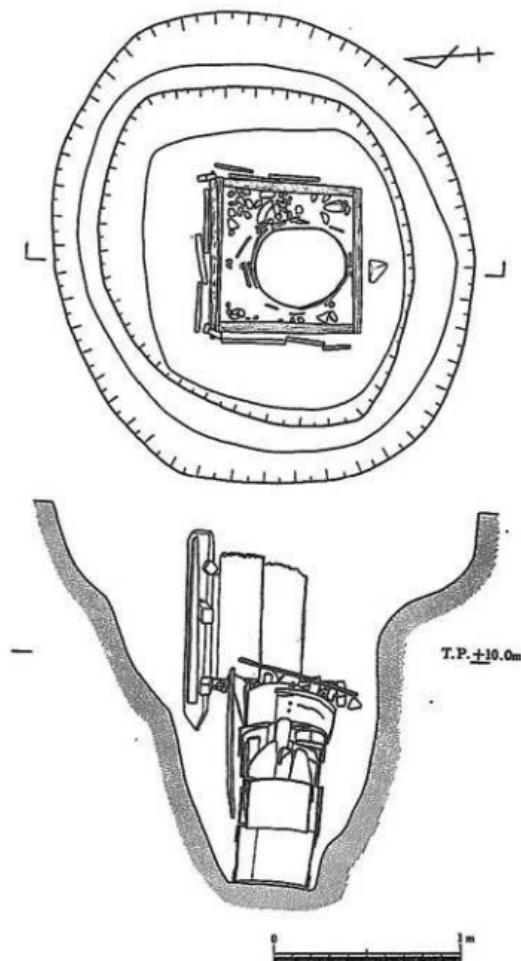


第14図 井戸3平面、断面図

井戸 4 (第15・16・30図、  
図版7・11・24・25)

井戸 3 の西隣に所在する。掘方は2段掘りの形状である。掘方上部の大きさは2.5×2.2m、深さ0.5~0.6mで、同下部は更に径約1.6m、深さ1.5m掘り込んでいる。検出面から掘方底までの深さは2.0mを測る。

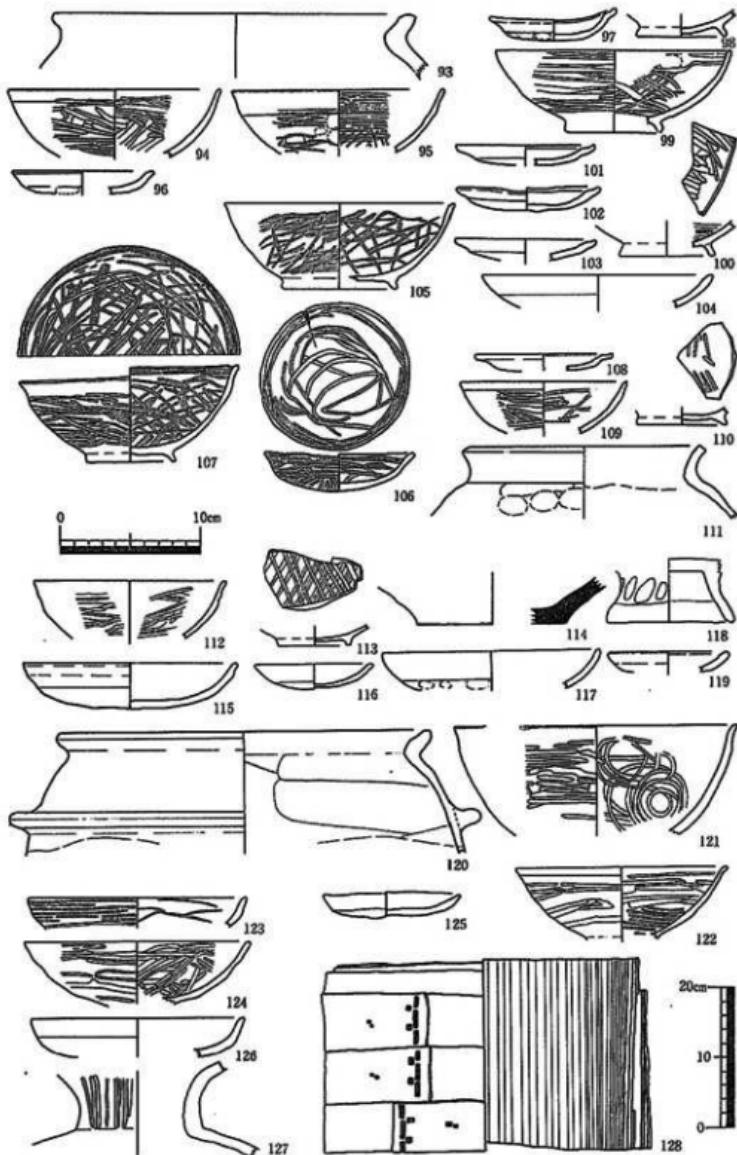
底から1.0mまでは井筒として曲物を4段積み重ねている。曲物を補強するため、内あるいは外に曲物の底板等を挿し込み、また長さ80cm、幅15cmの板を外に添えたりしている。曲物井筒の上面には、5cm角で長さ80cmの角材を正方形に組み合わせ、その内に3~5cm大隙を設け、さらにその上に井戸枠として方形の木枠が組まれている。木枠は四本の隅柱を立て、柄孔をあけて横木をはめ込み、この木組の外に側板を立てたものである。南辺および東辺の南半部は、井戸の発達時に倒壊し、あるいは抜かれてしまっている。このよ



第15図 井戸4平面、断面図

うな形状の井戸の例は、長原遺跡では、No.24トレンチのS E 085、また1983年に大阪府教育委員会によって調査された津堂遺跡の井戸に見られる。

遺物は、上部の木枠および下部の曲物内あるいはそれぞれの掘方埋土中から瓦器、土師器、須恵器、白磁が出土している。(112~116)は木枠掘方、(117~119)は曲物掘方、(120~122)は



第16図 平安時代中・後期各井戸出土遺物

木枠内、(123～128)は曲物内の埋土中からの出土遺物である。

(112)は瓦器碗で、復元口径13.7cm。(113)は瓦器碗の底部で、内底面に格子状暗文が施されている。(114)は須恵器で、おそらく捏鉢になろうと思われる。(115)は土師器皿で、復元口径15.0cm。(116)は土師器小皿で、復元口径8.4cm、器高1.7cm。

(117)は土師器皿で、復元口径15.2cm。(118)は土師器で、台付皿になるものと思われる。皿部は胎土に板が多く含まれており、黒色を呈している。(119)は土師器小皿で、復元口径8.5cm。

(120)は土師器羽釜で、内面に煤が付着している。また鉢の下部に粘土の接合痕が認められる。復元口径26.6cm。同鉢径33.5cm。(121)は瓦器の鉢で、口縁端部に片口状の落ちがある。外面は横方向の、内面は螺線状のミガキが施されている。復元口径20.0cm。(122)は瓦器碗で、内底面に平行状の暗文がある。形がいびつで口径の復元はむずかしいが、15.0cm程度になろう。

(123、124)は瓦器碗で、復元口径15.4、16.6cm。(125)は完形の土師器小皿で、いびつな形状を呈する。口径9.7cm、器高1.8cm。(126)は土師器皿で、復元口径15.0cm。(127)は土師器蓋の頸部で、外面に縱方向のミガキがある。

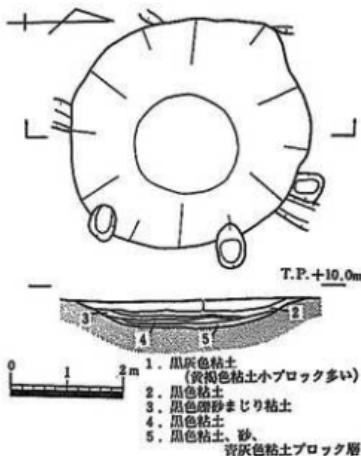
(128)の曲物は、下から2段目のものである。径45.5cmの曲物内に径43.5cmの曲物を入れて重ねたものである。

#### 土壤1 (第17・18・31図、図版7・25・26)

7区北部に所在するもので、ほぼ正円形。径4.0m、深さ0.5mを測る。埋土は下層が黒色粘土と疊砂ブロックmajiriの黒色粘土との互層で、

上層が黄褐色粘土ブロックmajiriの黒灰色粘土である。底が浅く、井戸と考えることはできない。出土遺物としては土師器、瓦器、白磁等が出土している。

(129、130)は土師器皿で、復元口径9.4cm、14.2cm。(131)は土師器の小型高杯の脚部である。(132、134)は土師器の甕で、復元口径14.4cm、15.8cm。(133)は土師器で、あまり類例を見ないものであるが、一応無頭の甕としておく。復元口径15.0cm。(135、136)は瓦器碗で、外面に指圧痕が明瞭に残り、密でないミガキが施される。どちらも復元口径16.2cmである。(137)は瓦器碗の底部である。(138)は瓦器小皿で、外面にはミガキが施されていない。完形で、口径9.2cm、器高2.3cm。(139、140)は白



第17図 土壌1平面、断面図

藏である。

**土墳2** (第18・31図、図版7・25・26)

土墳1によって、その東端部を切られるもので、東西2.2m、南北3.0m以上、深さ0.2mを測る。埋土は疊まじりの黒色粘質土で瓦器、土師器、須恵器等が出土した。

(141、142)は瓦器小皿で、復元口径8.7cm、8.8cm。(143、144)は瓦器碗で、内底面に格子状暗文を施す。復元口径15.0cm、14.9cm。(145)は土師器羽釜で、口縁部端を外に折り返している。復元口径30.9cm、同鉢径35.0cm。

**土墳3** (第18・32図、図版9・26)

8区の南西隅に所在するもので、No.35トレンチで検出された大きな土墳の一端であろう。深さ0.25mを測る。埋土は疊まじりの黒色粘質土で、瓦器、土師器、須恵器、サスカイトが出土した。

(146)は瓦器碗で、復元口径16.3cm。(147)は瓦器碗の底部で、内底面に格子状暗文を施す。

**溝5、6** (第18・31図、図版7・26)

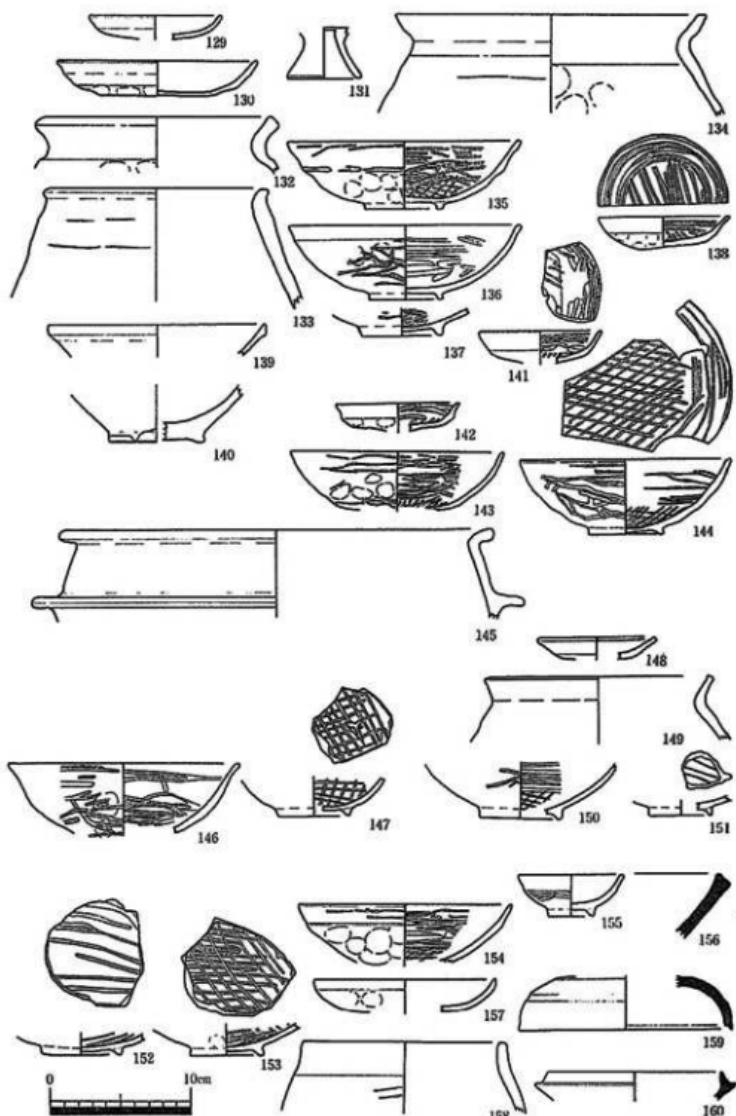
7区北半部に溝を2本検出した。溝5は土墳1の東に所在する南北方向のもので、検出長3.1m、幅0.35m、深さ0.1m。土師器小皿(148)、同壺(149)、瓦器碗(150)が出土している。溝6は土墳2に切られるもので、検出長1.5m、幅0.4m、深さ0.05mを測る。瓦器碗が出土した。(151)

5、6、7区には、この時期のものとしては以上の遺構以外に小ビットが多く検出されたが、掘立柱建物3以外組み合うものがなかった。

**7区地山面上の包含層、擾乱層出土遺物** (第18図、図版25・26)

7区の地山面の直上の包含層、擾乱層には、この時期を中心とする遺物が多く含まれていた。

(152、153)は瓦器碗の底部で、内底面に平行状暗文、格子状暗文が見られる。(154)は瓦器碗で、復元口径15.0cm。(155)は瓦器の小型碗である。高台はしっかりしており、外面に横方向のミガキが認められた。復元口径7.2cm。(156)は須恵器で捏鉢であろう。(157)は土師器皿、復元口径12.8cm。(158)は土師器で、(133)と同様の器種である。復元口径14.2cm。(159、160)は須恵器の坏蓋、坏身である。復元口径15.0cm、12.4cm。



第18図 平安時代中・後期名遺構出土遺物

## 第5節 鎌倉時代の遺構と遺物

この時期の遺構としては、掘立柱建物、ピット列、大溝、井戸、ピット、溝を検出した。遺構は1、2、3区と10、11、12区に限られる。1、2、3区の遺構は、中世包含層である暗灰褐色砂質土を除去した面で検出され、黄褐色砂をベースに切り込まれ、黒灰色～暗褐色土が埋土となるものである。10、11、12区の遺構は、褐灰色粘質シルト層（中世包含層）を除去した面で検出されたもので、埋土は灰色粘土である。（付図3）

### 掘立柱建物4（第24図、図版15）

1区東半部で検出されたもので、規模は東西2間（4.0m）、南北2間（5.3m）である。柱間は東西では2.0mであるが、南北では2.8mと2.5mで異なる間隔をもつ。柱穴は径0.3～0.5m、深さ0.2～0.3m。柱穴の1つに柱痕が残存していた。建物の南北の方向はN-5°-Wを測る。

### 掘立柱建物5（第24図、図版15）

1区東南部で検出されたもので、規模は東西3間（6.6m）、南北1間（2.6m）である。東南隅の柱穴は見あたらなかった。柱間は東西では2.4mと2.0mで異なる間隔をもつ。柱穴は径0.3～0.6m、深さ0.1～0.3m。建物の南北の方向はN-4°-Wを測る。

### 掘立柱建物6（第24図、図版15）

1区中央で検出されたもので、東西2間（3.8m）、南北5間あるいはそれ以上の規模のものである。柱間は東西、南北とも1.9mである。柱穴は径0.3～0.4m、深さ0.2～0.25m。建物の南北の方向はN-4°-Wを測る。

### 掘立柱建物7（第24図、図版15）

1区西半部で検出されたもので、東西1間（2.2m）南北2間（3.8m）である。柱間は南北で1.9m、柱穴は径0.2～0.5m、深さ0.2mを測る。建物の南北の方向はN-7°-Wである。

### ピット列（第24図、図版15）

1区東南隅で4つのピットが1直線に並ぶ。西の3つは1.9mの等間隔で、東の1つは1.6mと異なる間隔を置いている。柱穴は径0.3～0.4m、深さ0.1～0.15mで、方向は出土標の東西方向には合致する。ピット列は東西3間の掘立柱建物になることが十分に考えられる。

以上の掘立柱建物群やピット列は、出土遺物が少なく、詳しい時期は決めがたい。

### 大溝（第19・24図、図版15・27・28）

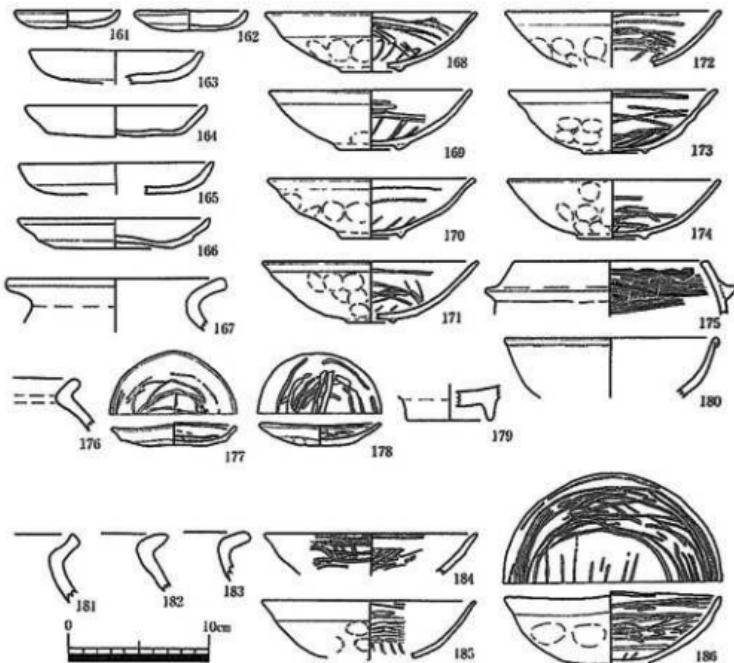
1区西部で南北に流れるもので、2段掘り状を呈する。溝の上端幅2.5～3.0m、段上で測ると幅1.0～2.0m、溝底の幅0.5～1.3m、深さ0.4～0.5mである。溝底部のレベルは北端でT.P.+9.8m、南端で同9.95mであり、水の流れは南→北の方向である。この大溝はNo.26、27、55トレンチで検出されたSD 211の続きに相当する。『長原』によれば、No.27トレンチでは水の流れが北→南の方向にあるので、同トレンチと1区の間で水を外に出す溝か、水だめの施設があると考えられる。また、大溝は2区にはのびないので、1、2区間で途切れるか、屈曲すると考えられ

る。出土遺物としては、瓦器、土師器、瓦、陶器、白磁、青磁があった。

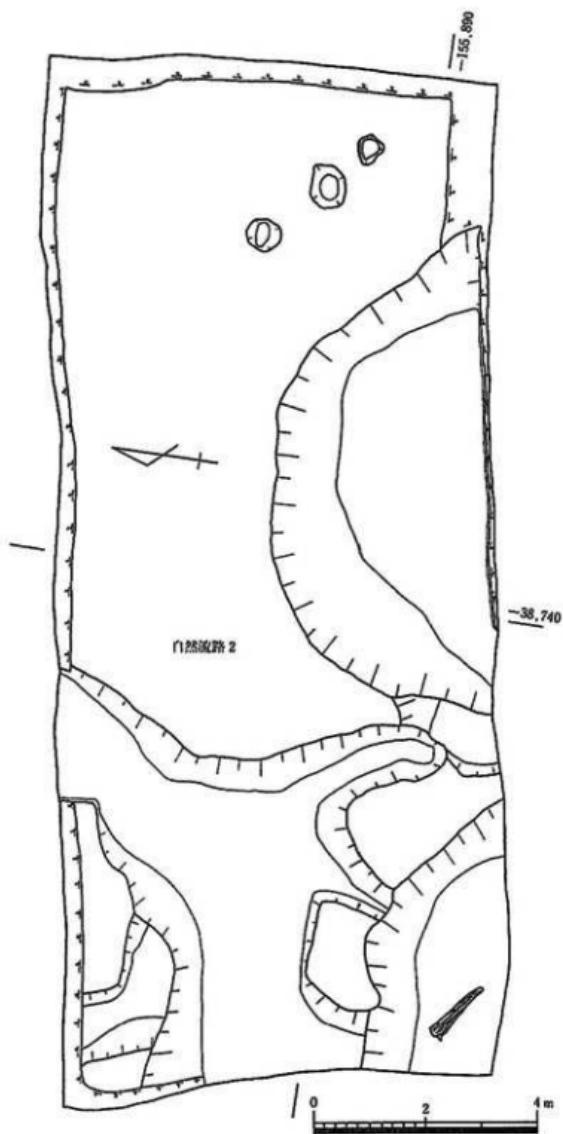
(161、162)は土師器小皿で口径7.4、8.1cm。(163～166)は土師器皿で、復元口径12.2、12.8、13.8、13.4cm。(167)は土師器壺の口頸部で口径15.6cm。(168～174)は瓦器碗で、内面底に平行状暗文が施される。外面に指圧痕が明瞭に残り、ミガキはない。断面三角形の高台が貼付られている。復元口径14.2～15.2cm、器高4.3～4.5cmである。(175)は瓦器の羽笠で、内面に横方向の刷毛目を施している。復元口径13.8cm。(176)は土師器羽笠の口縁部で、口径の復元はできなかった。(177、178)は瓦器小皿で、内面に粗なミガキを施す。口径8.8、8.5cm。(179、180)は白磁である。

#### 井戸5、6 (第26図、図版15)

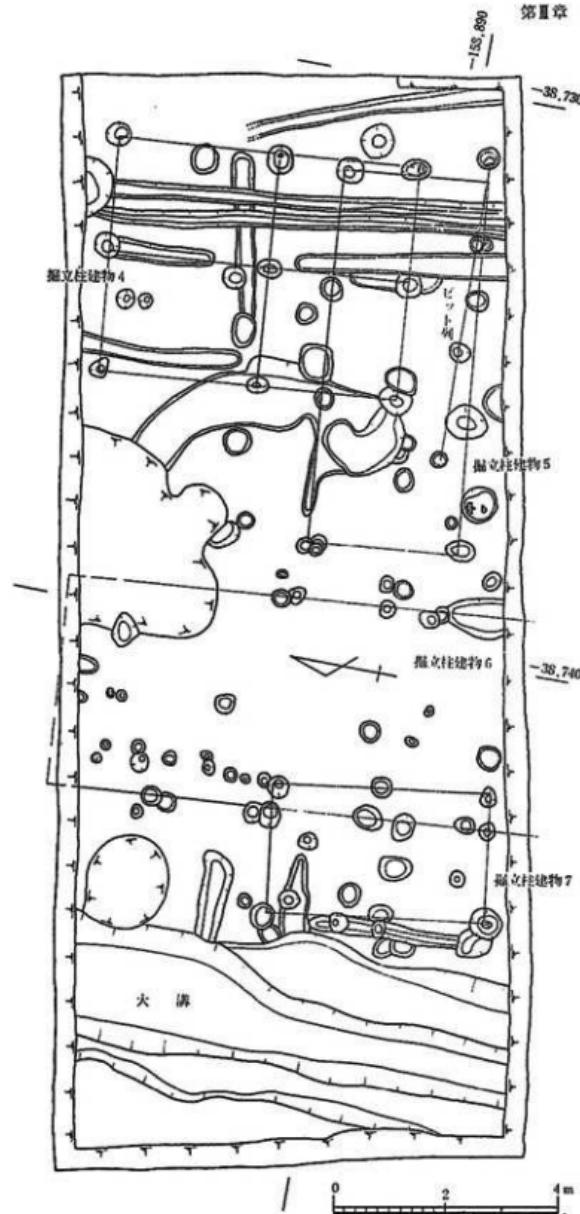
どちらも2区中央に所在するもので、井戸5は径0.5m、検出深0.4m。井戸6は径0.7～0.8m、検出深0.3mである。井戸の上部は中環建設時に削平されており、中世造構面からの深さはそれぞれ0.9m、0.75mとなる。ともに井筒ではなく、素掘りのものである。井戸5からは遺物はなく、井戸6からは瓦器碗片が出土した。



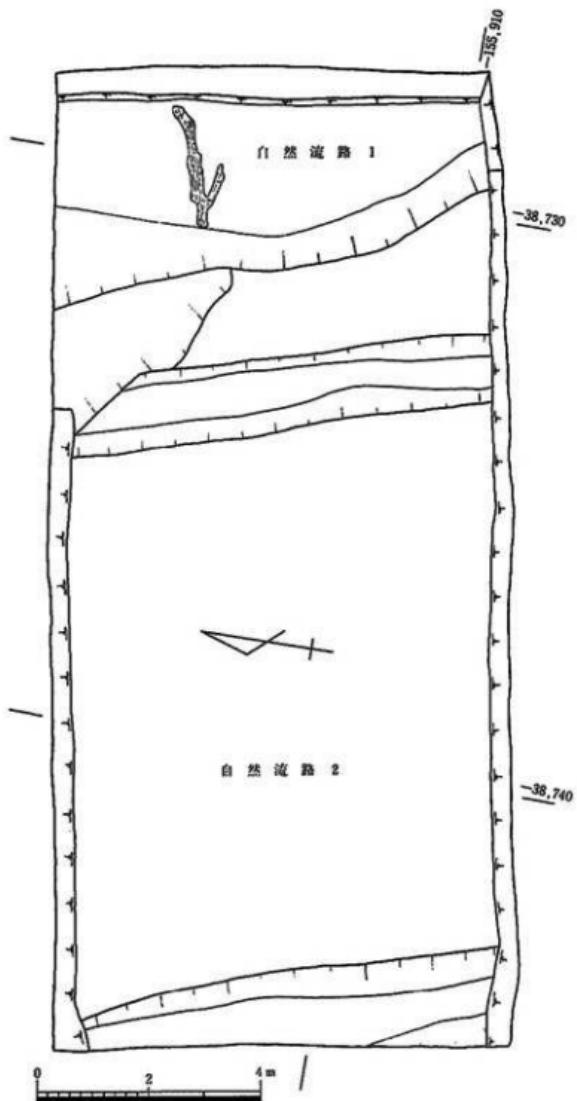
第19図 錦糸時代大溝、井戸7出土遺物



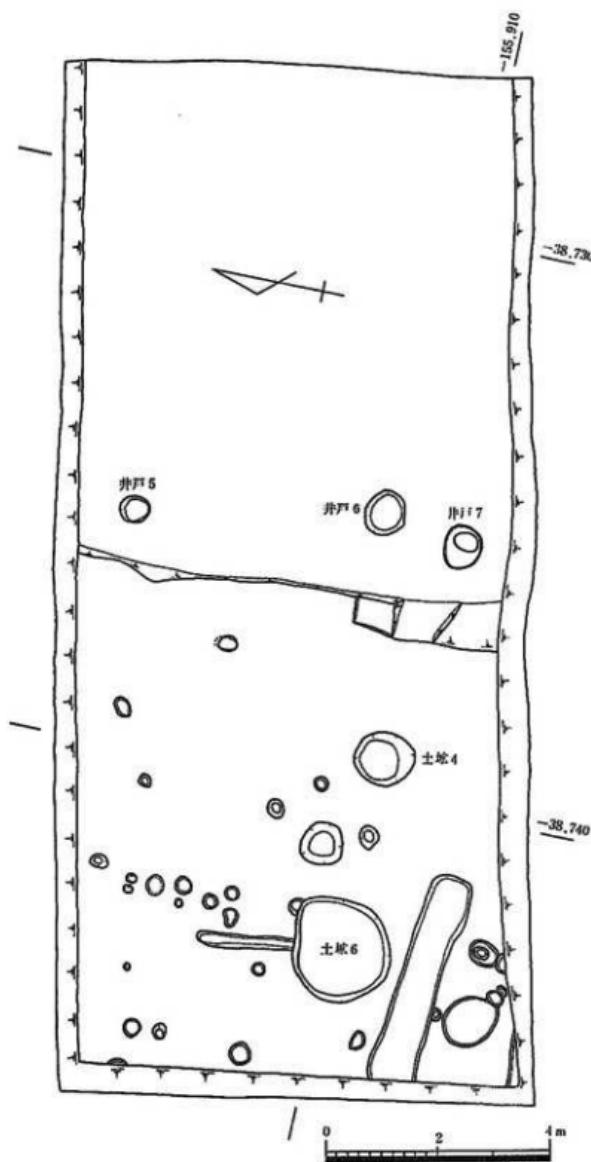
第23図 1区古墳時代遺構平面図



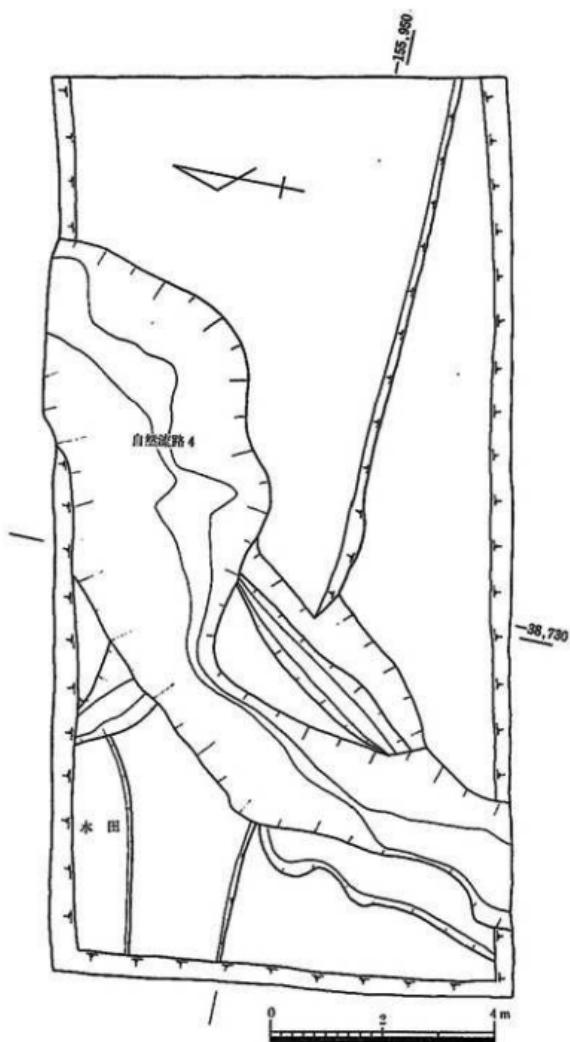
第24図 1区鎌倉時代遺構平面図



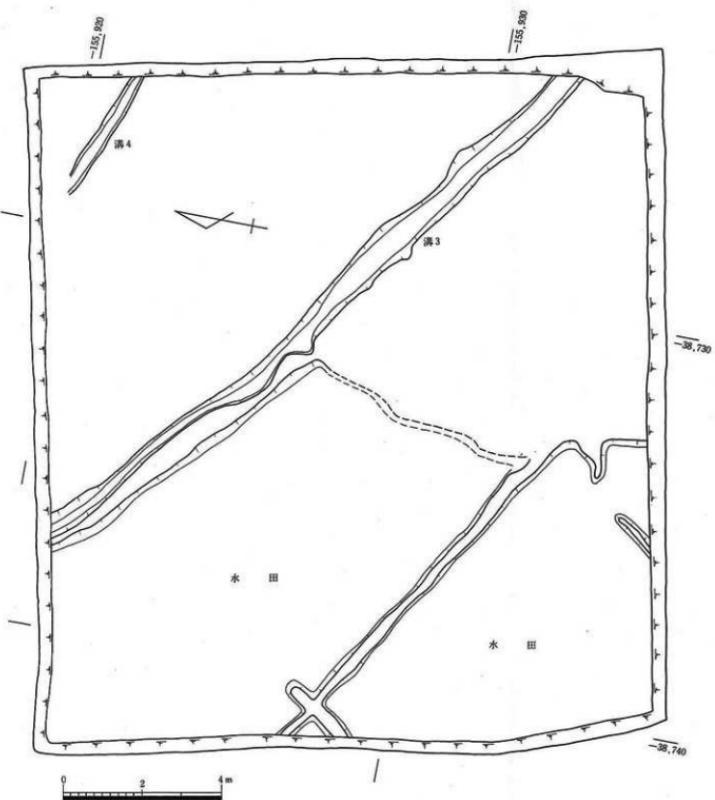
第25図 2区古墳時代造構平面図



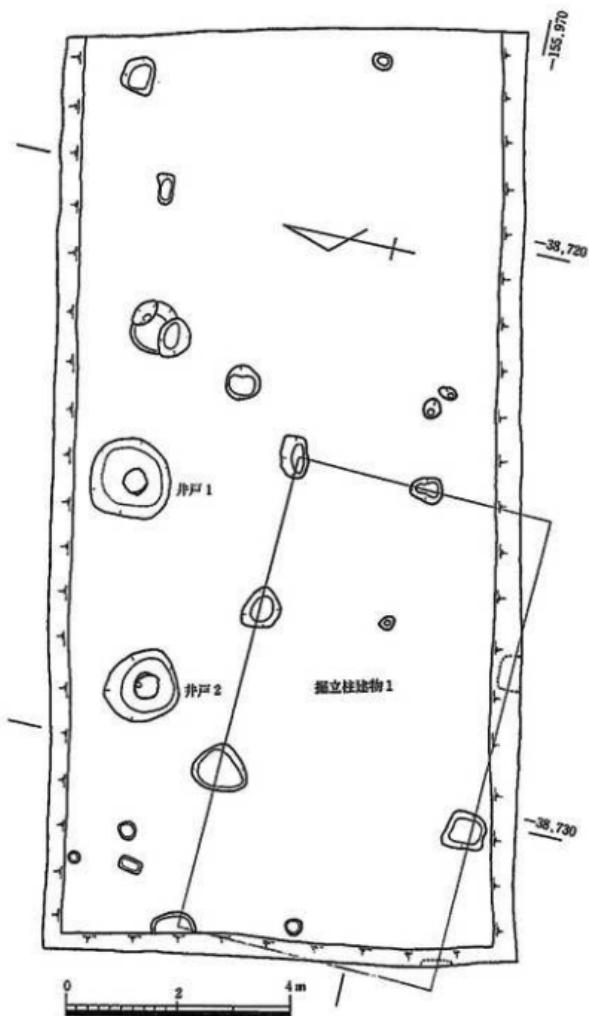
第26図 2区縄文時代遺跡平面図



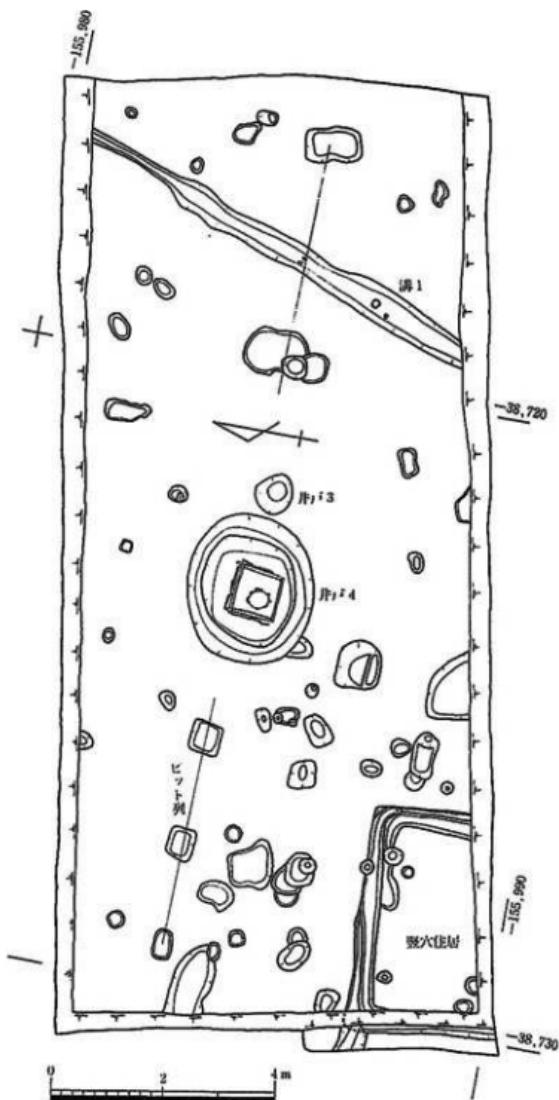
第27図 4区地山面造構平面図



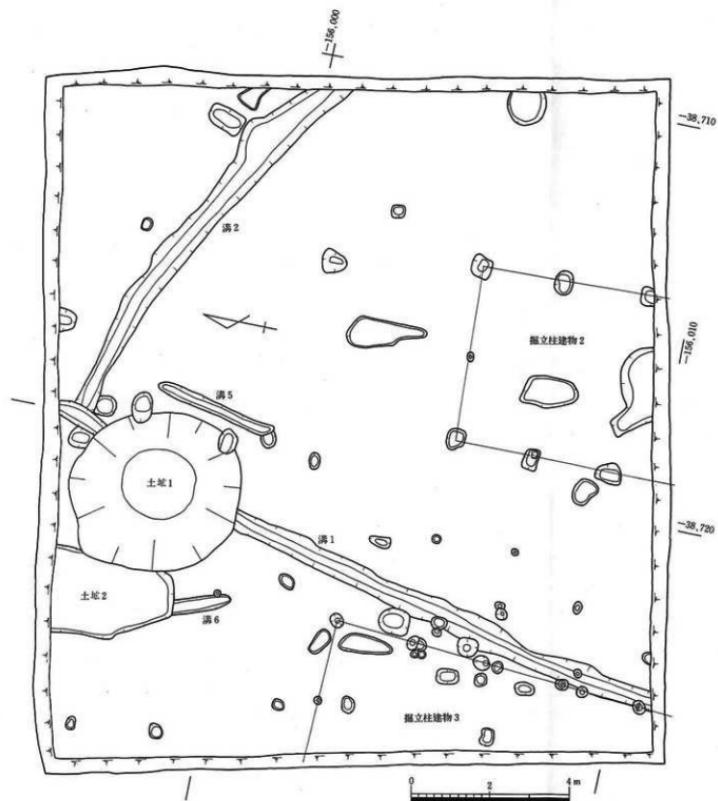
第28图 3区古墳時代遺構平面図



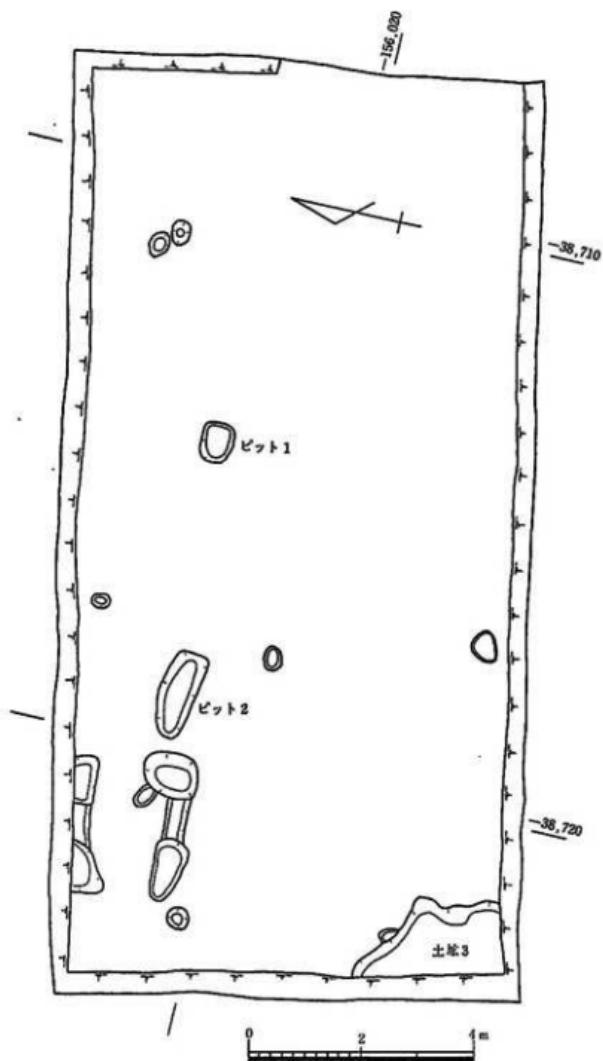
第29図 5区地山面遺構平面図



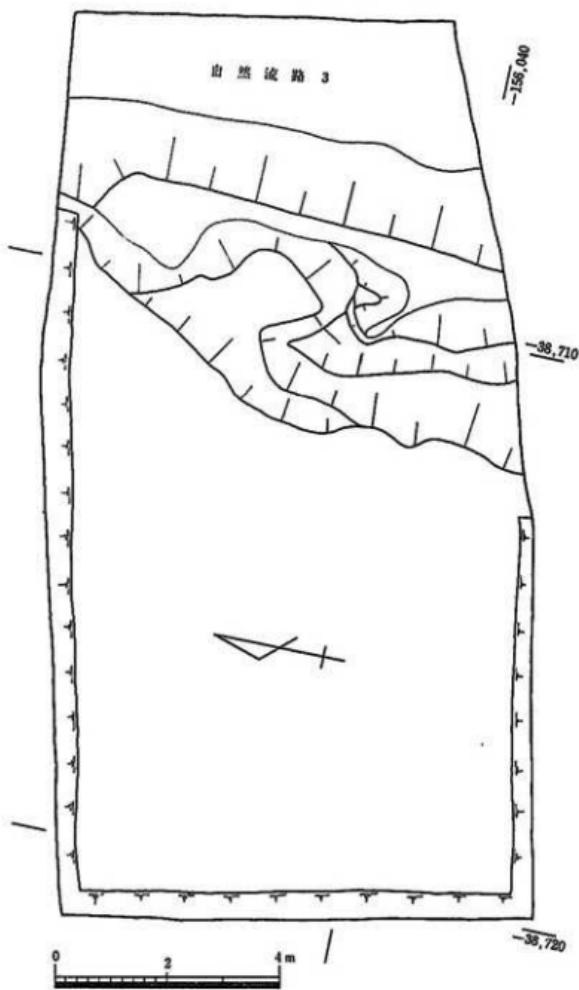
第30図 6区地山面断面図



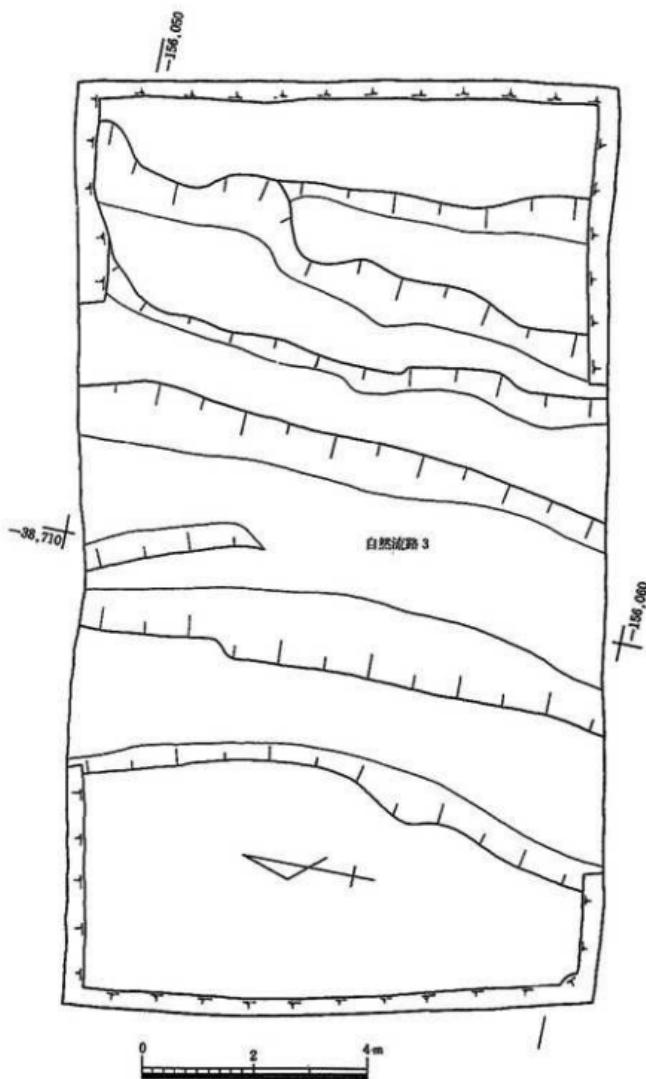
第31図 7区地山面遺構平面図



第32図 8区地山面造構平面図



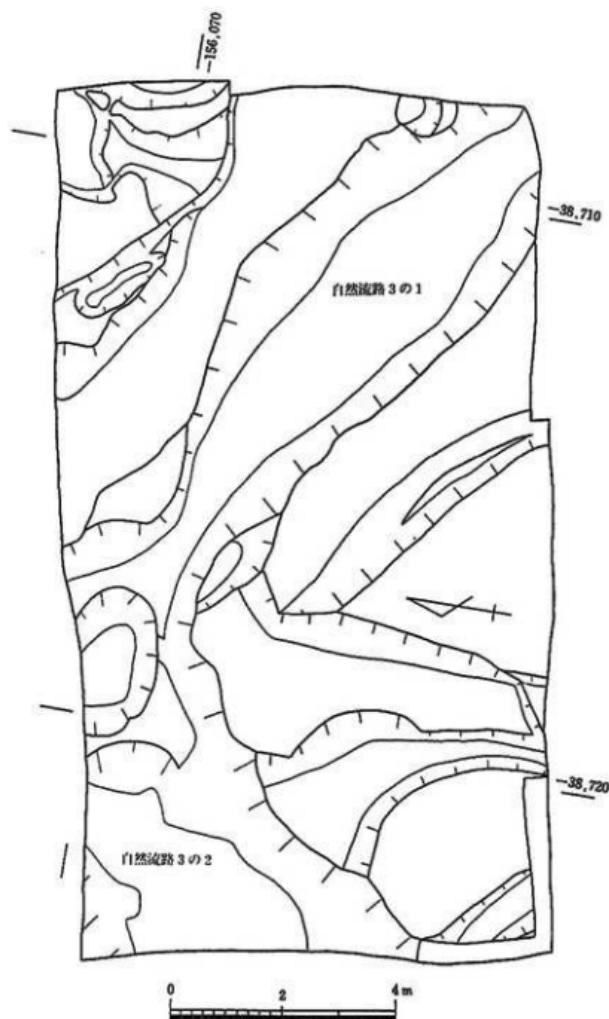
第33図 9区古墳時代遺構平面図



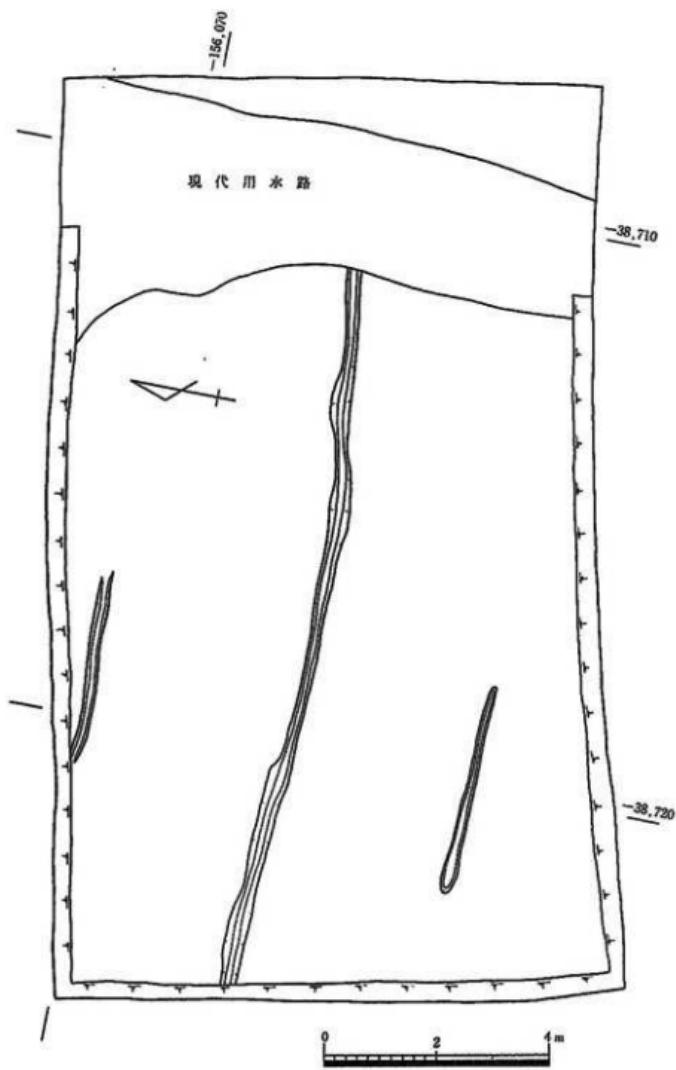
第34図 10区古墳時代遺構平面図



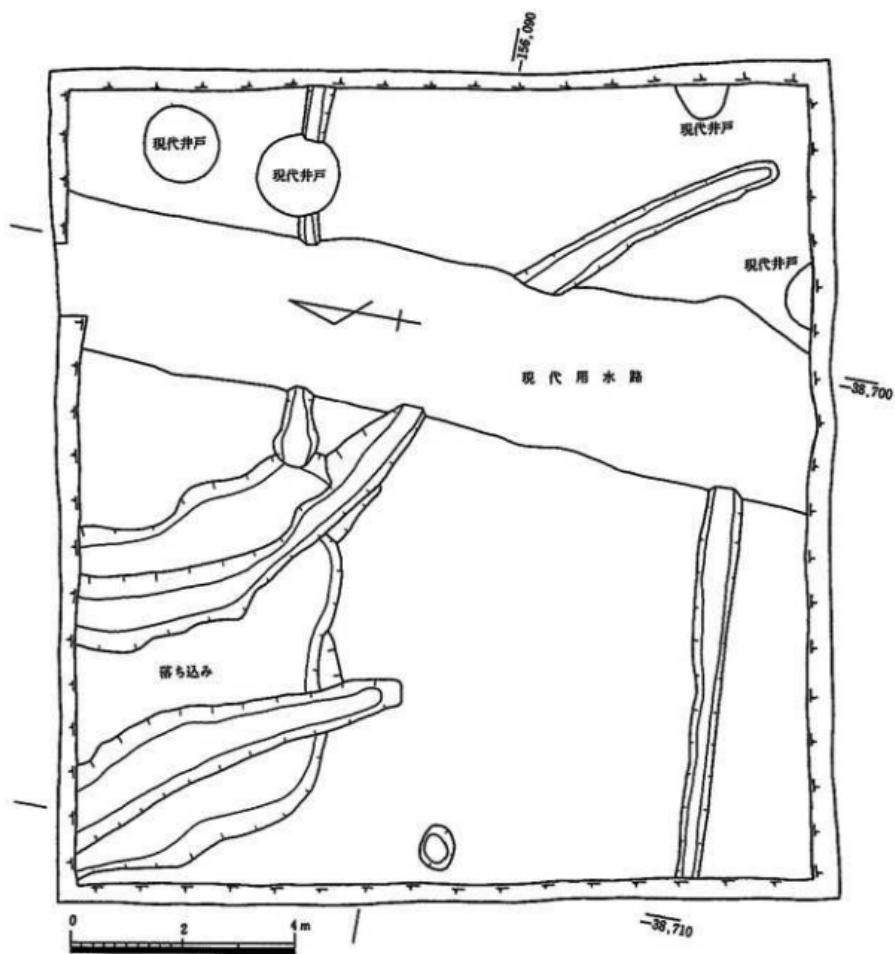
第35図 10区鍾乳時代遺構 平面図



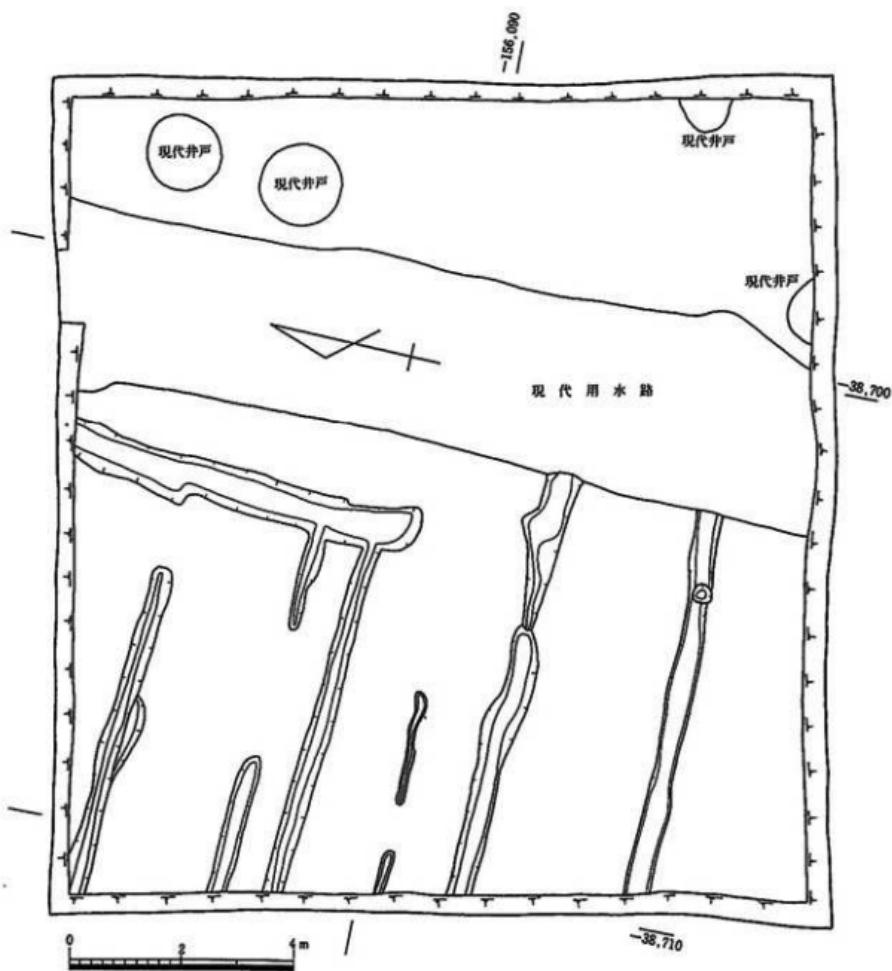
第36図 11区古墳時代遺構平面図



第37図 11区縁合時代遺構平面図



第38図 12区古墳時代遺構平面図



第39図 12区鎌倉時代遺構平面図

# 図版



長原（その2）調査区全景（北から）





1区（南から）



2区（北から）



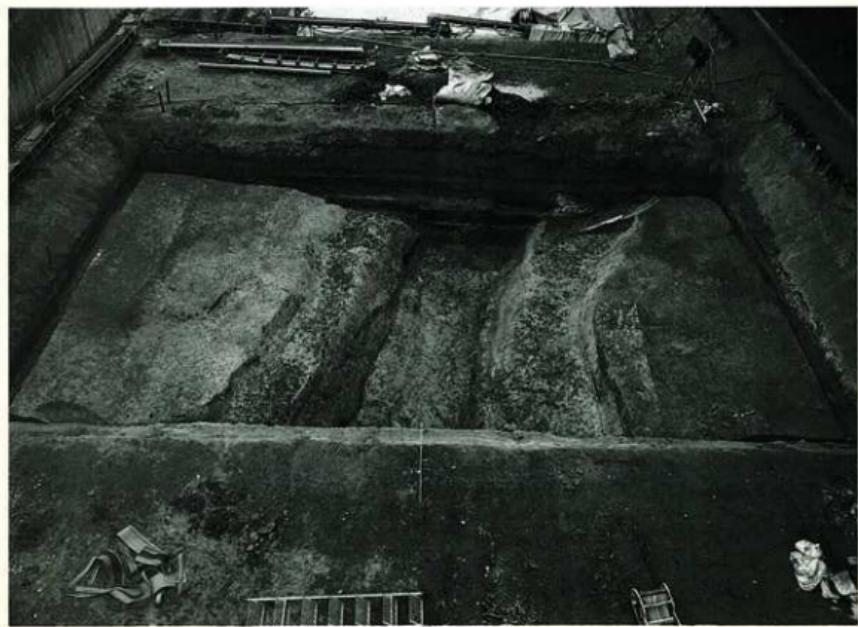
3区（南から）



竪穴住居跡（南から）



9区（北から）



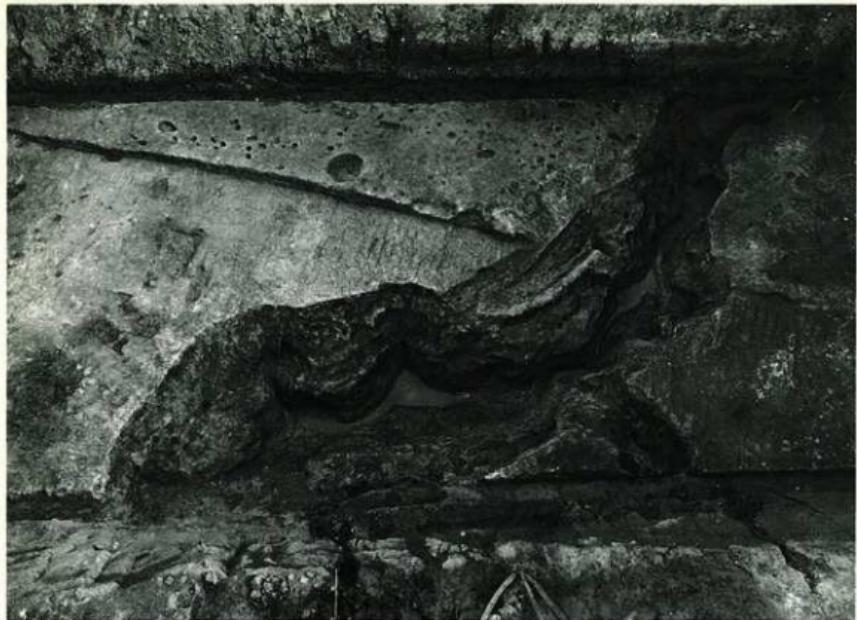
10区（北から）



11区（南から）



12区（南から）



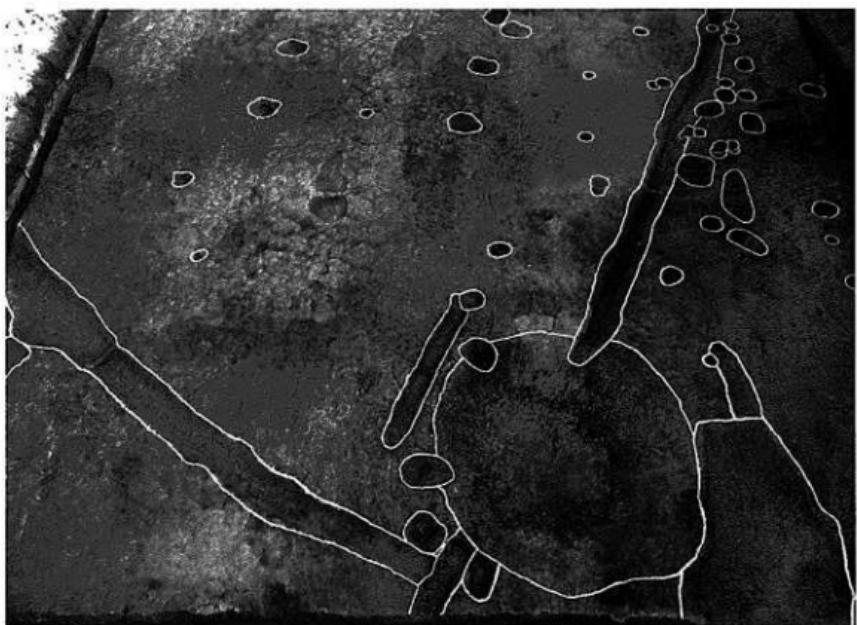
4区（北から）



5区（南から）



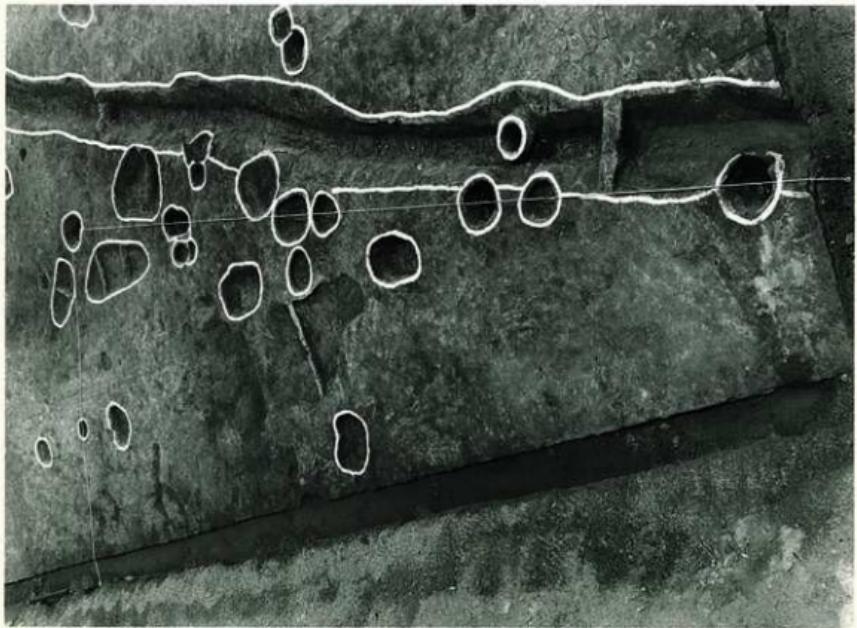
6区（南から）



7区（北から）



掘立柱建物2（南から）



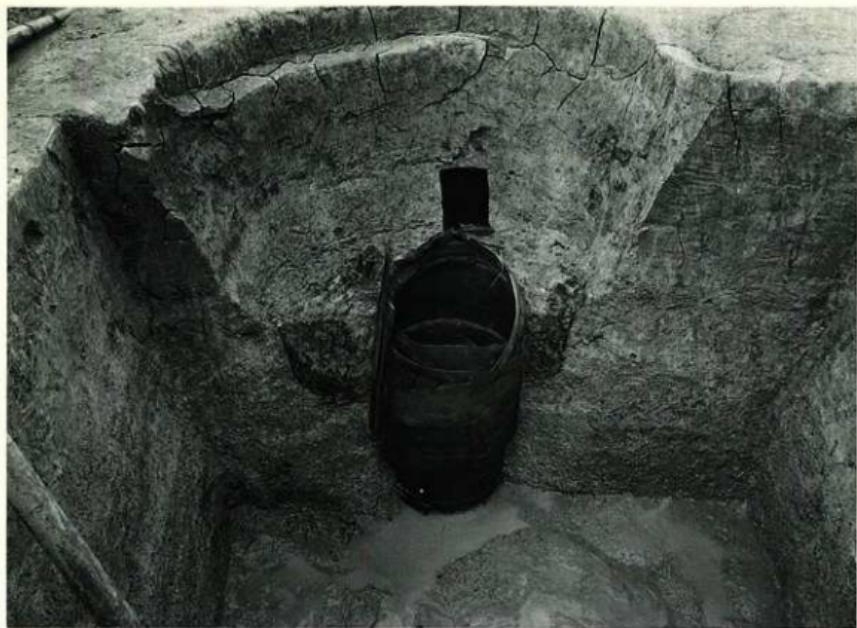
掘立柱建物3（南から）



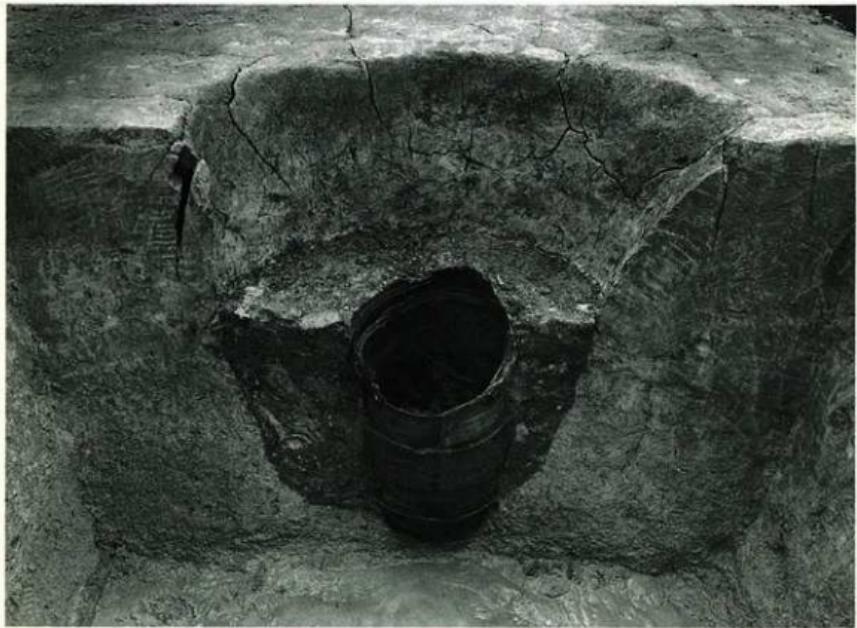
8区（南から）



ピット1土器出土状況（南から）



井戸1（西から）



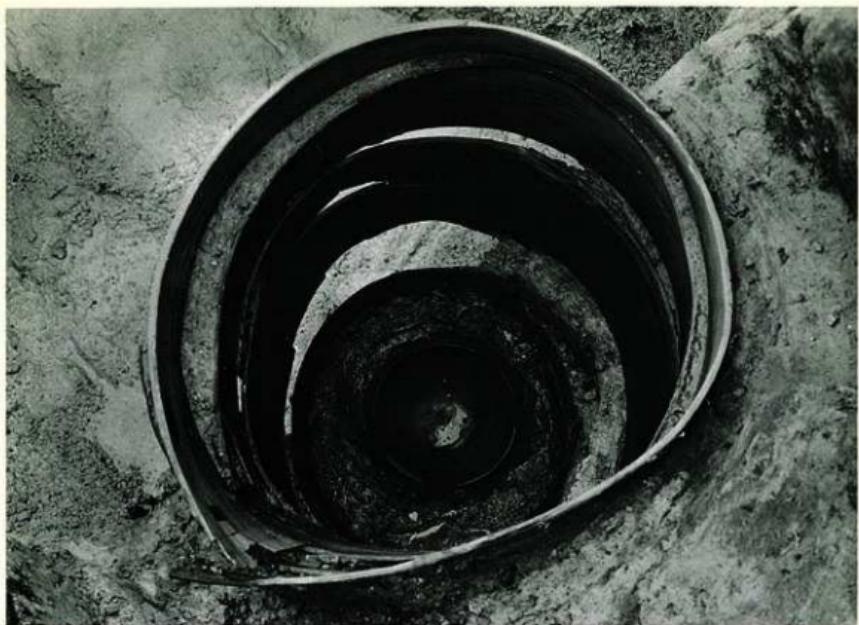
井戸2（東から）



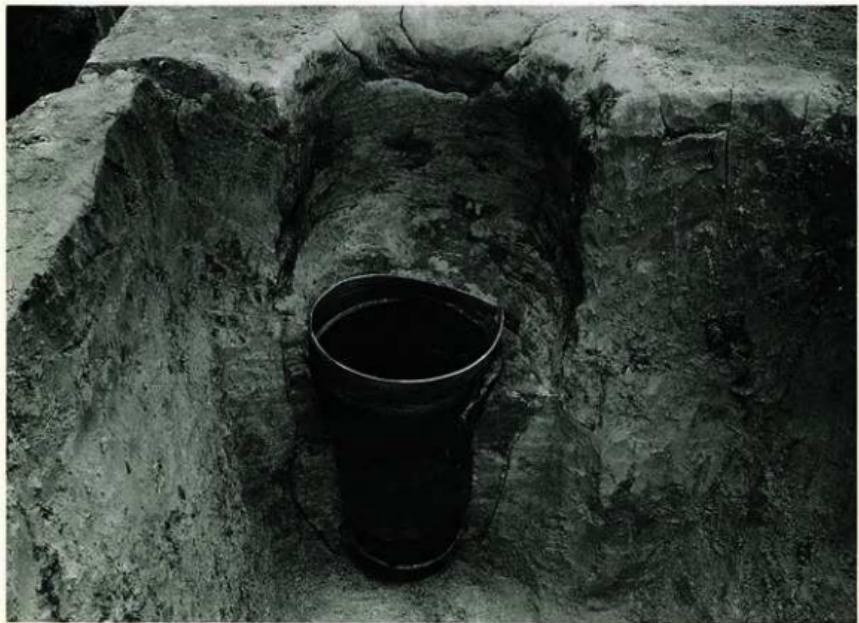
上部の木組（南から）



下部の曲物（西から）



瓦器碗出土状況



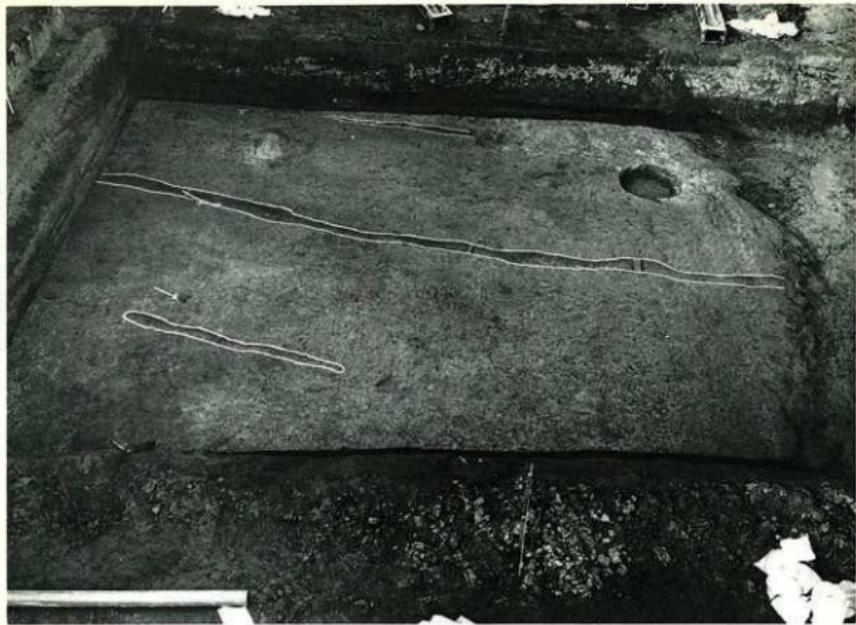
たちわり断面（東から）



井戸3（東から）



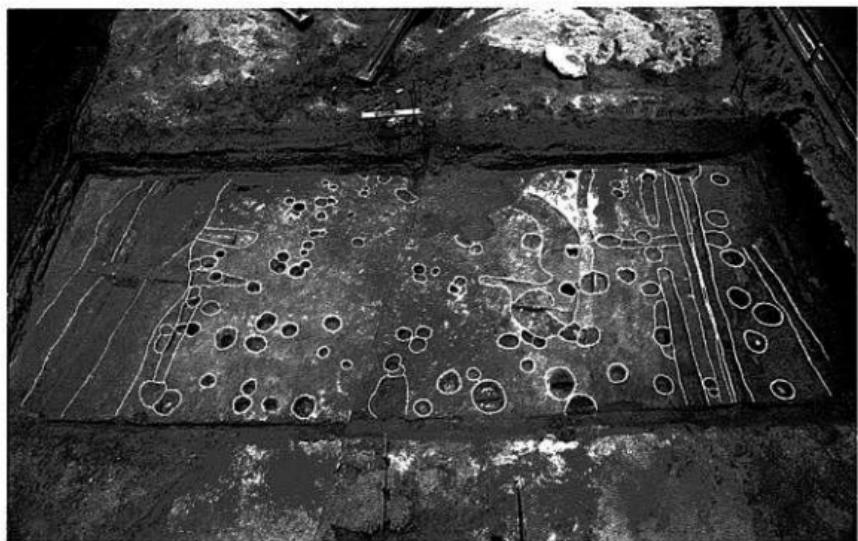
10区（北から）



11区（南から）



12区（南から）

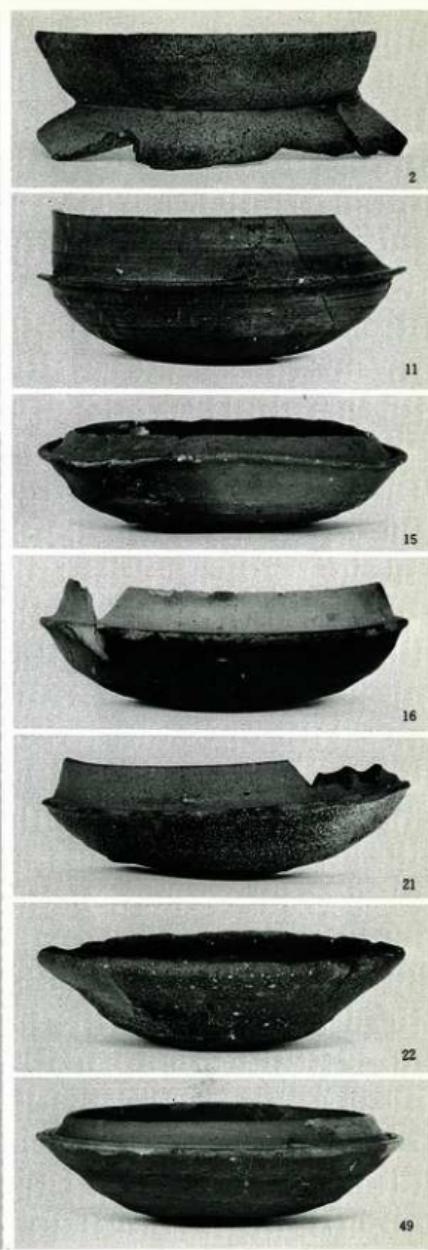
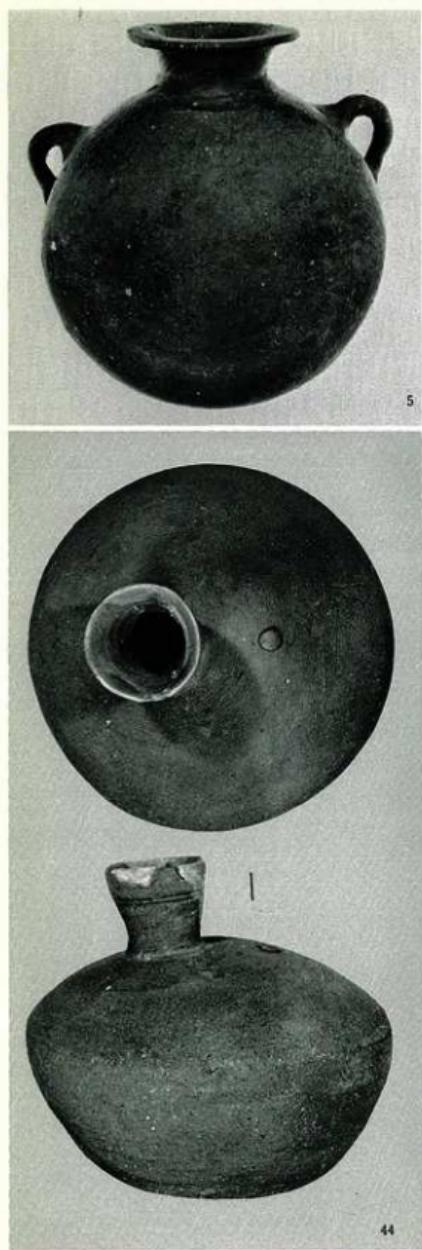


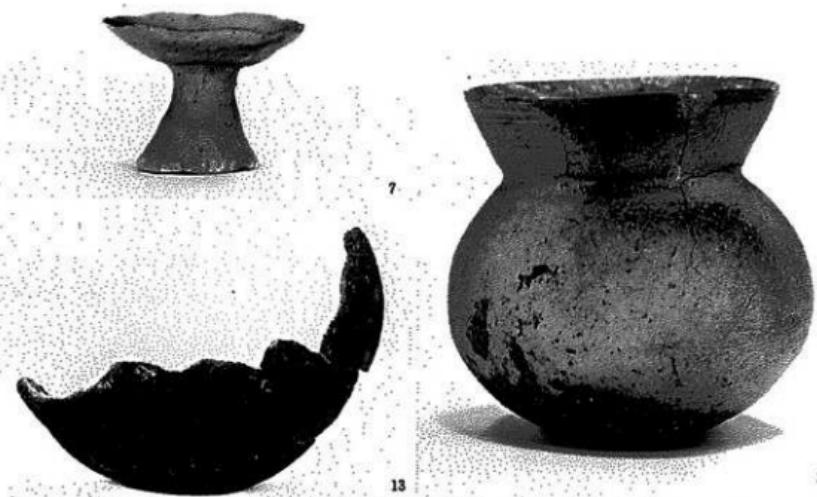
1区（南から）



2区（北から）

圖版一六 古墳時代自然流路、溝1出土土器





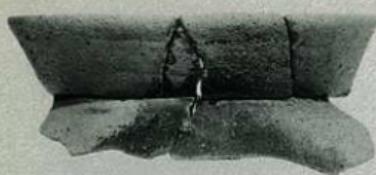
7

13

36



46



1



12



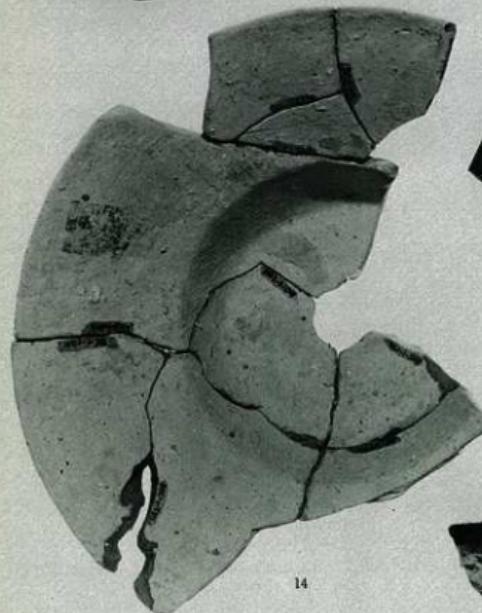
18



10



9



14



19

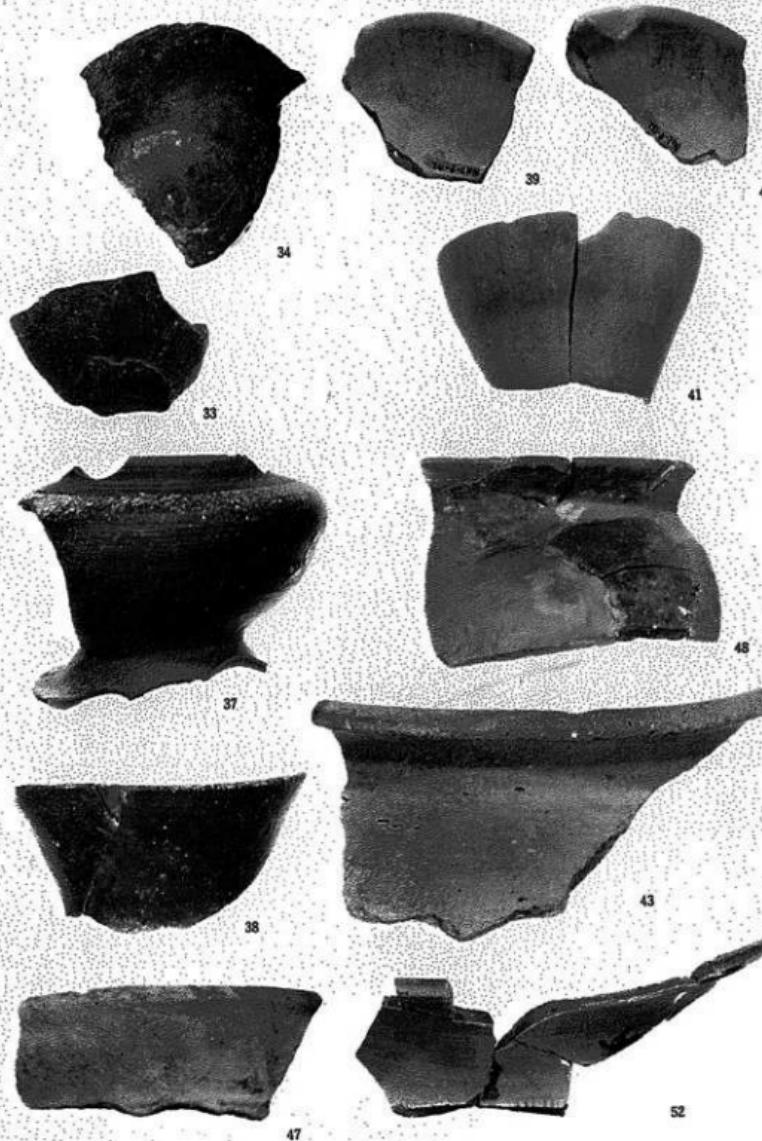


20

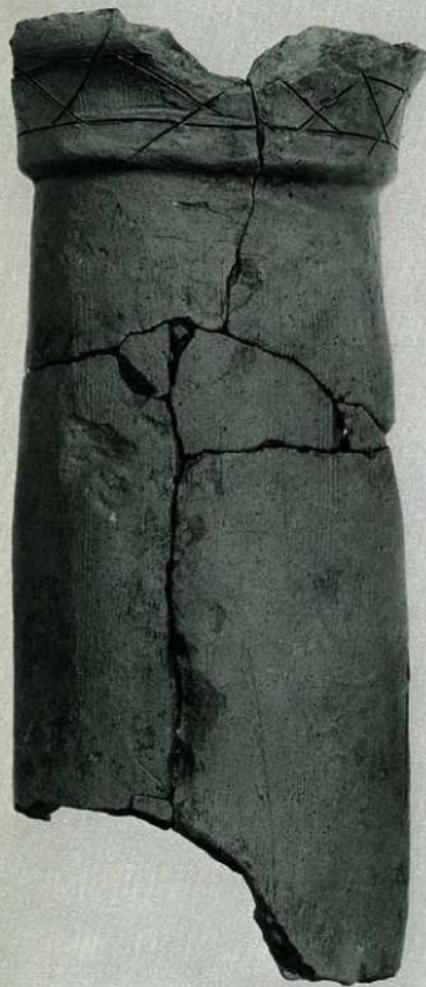


17

図版一九 古墳時代各遺構出土土器



圖版二〇 古墳時代自然流路、溝1出土形象埴輪



27

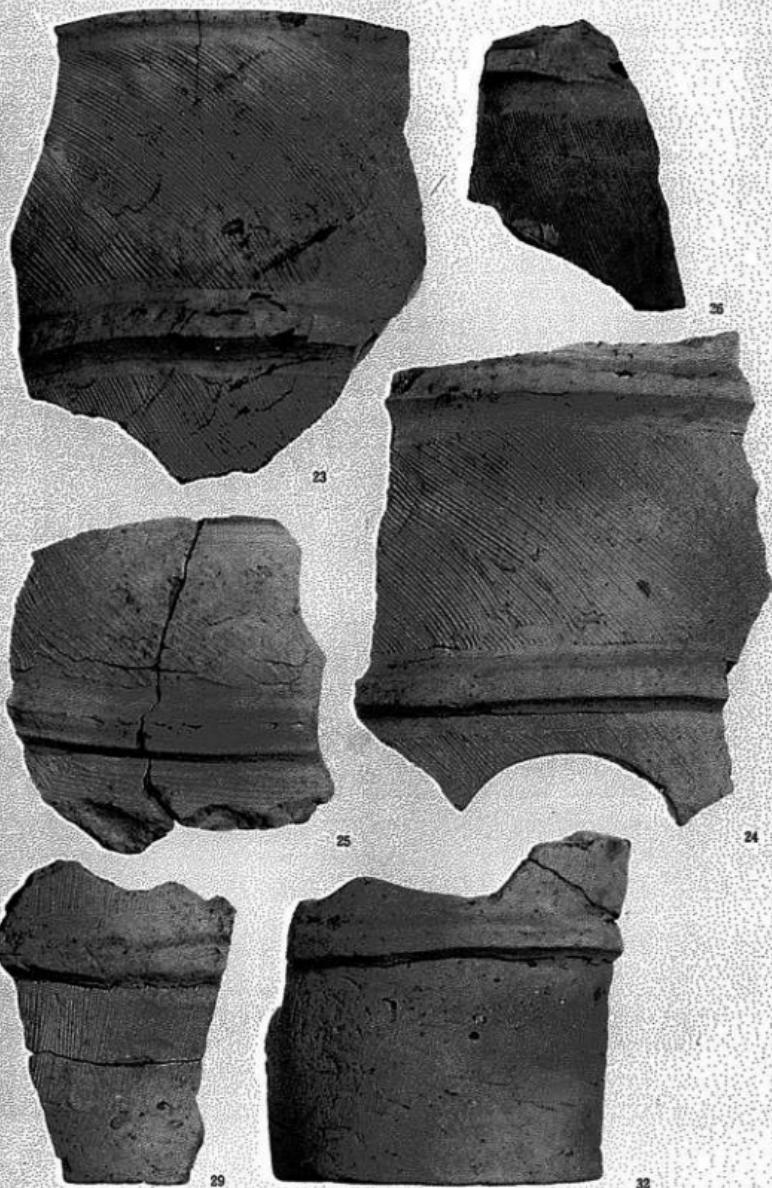


30



31

図版二一 自然流路2・3出土埴輪



圖版二三 平安時代前期遺構、包含層出土土器



58



61



62



65



77



68



78



66

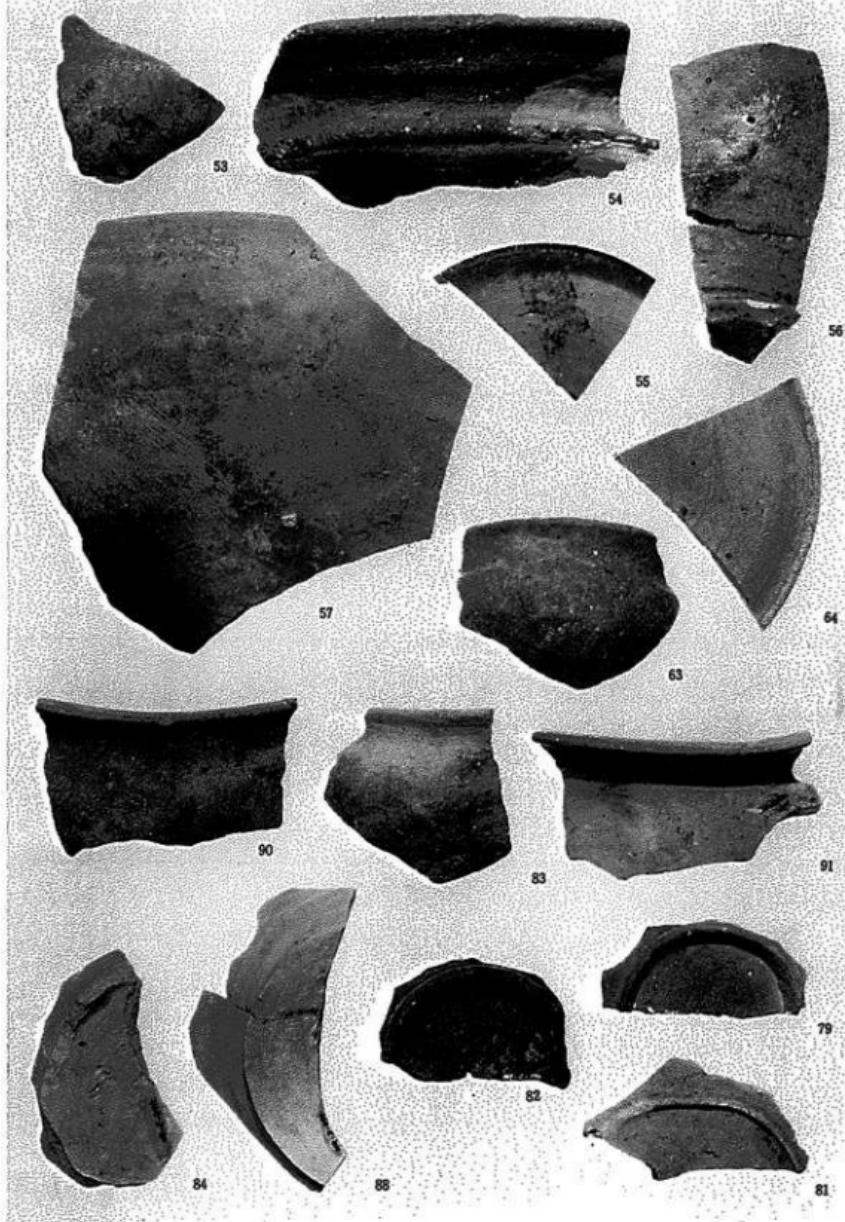


71

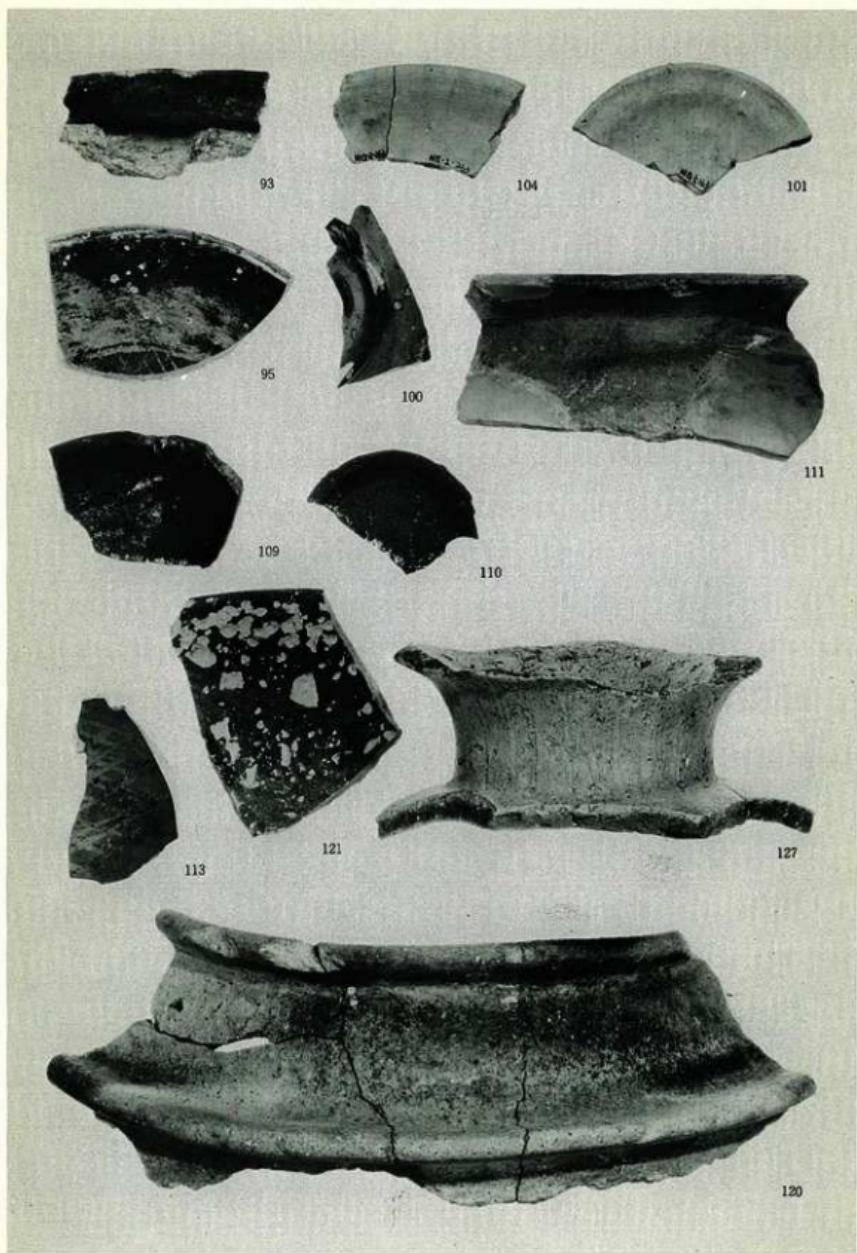


92

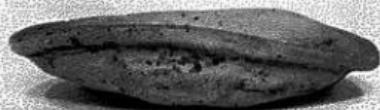
図版三 平安時代前期遺構、包含層出土土器



図版二四 平安時代中・後期各井戸出土土器



図版二五 平安時代中・後期遺構、包含層出土土器



97



102



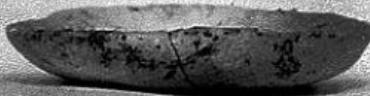
105



115



106



129



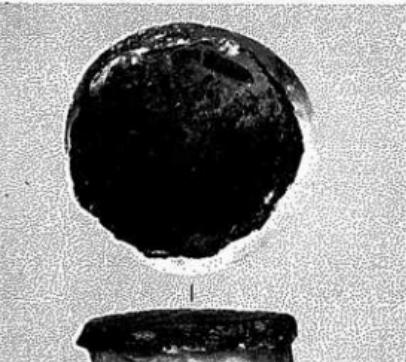
138



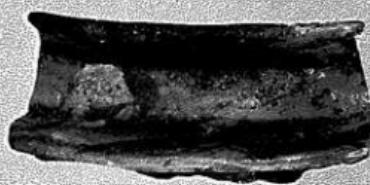
107



142



118

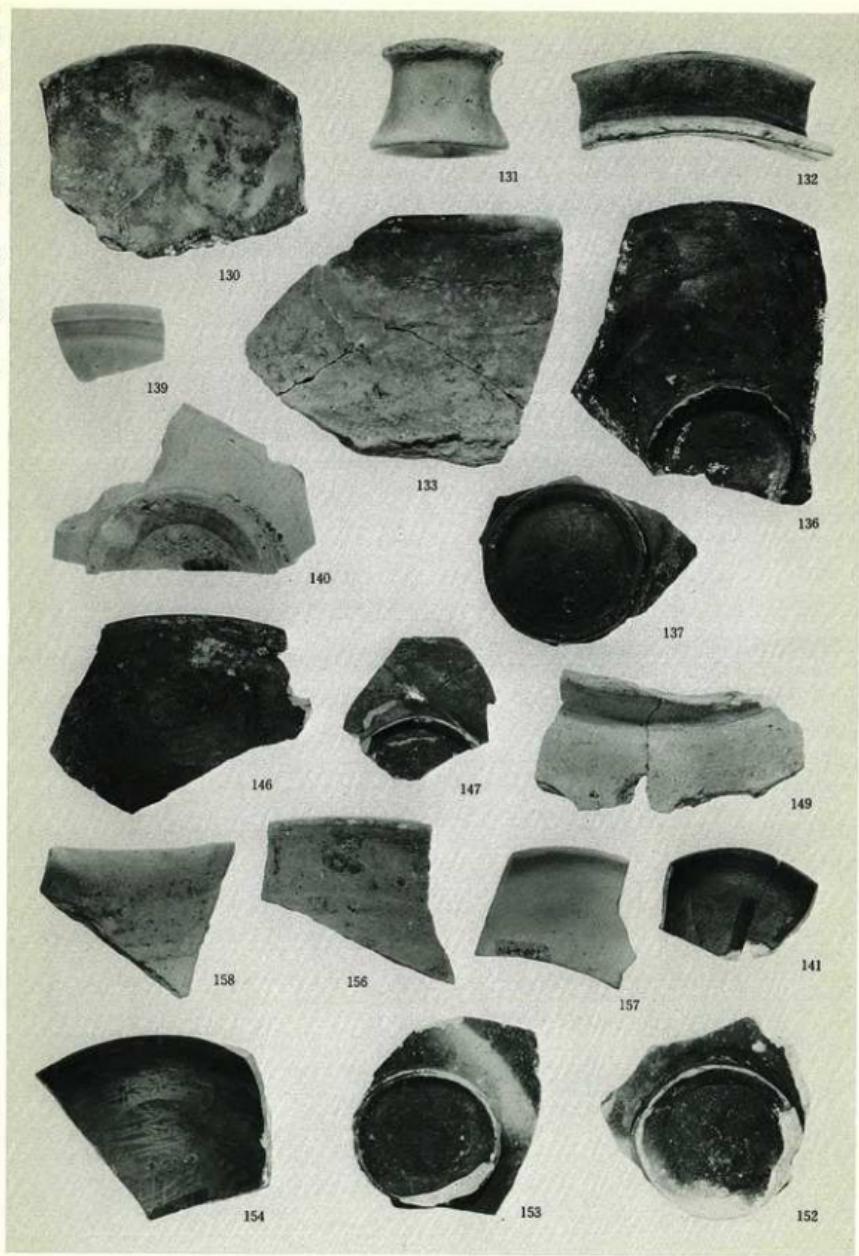


145

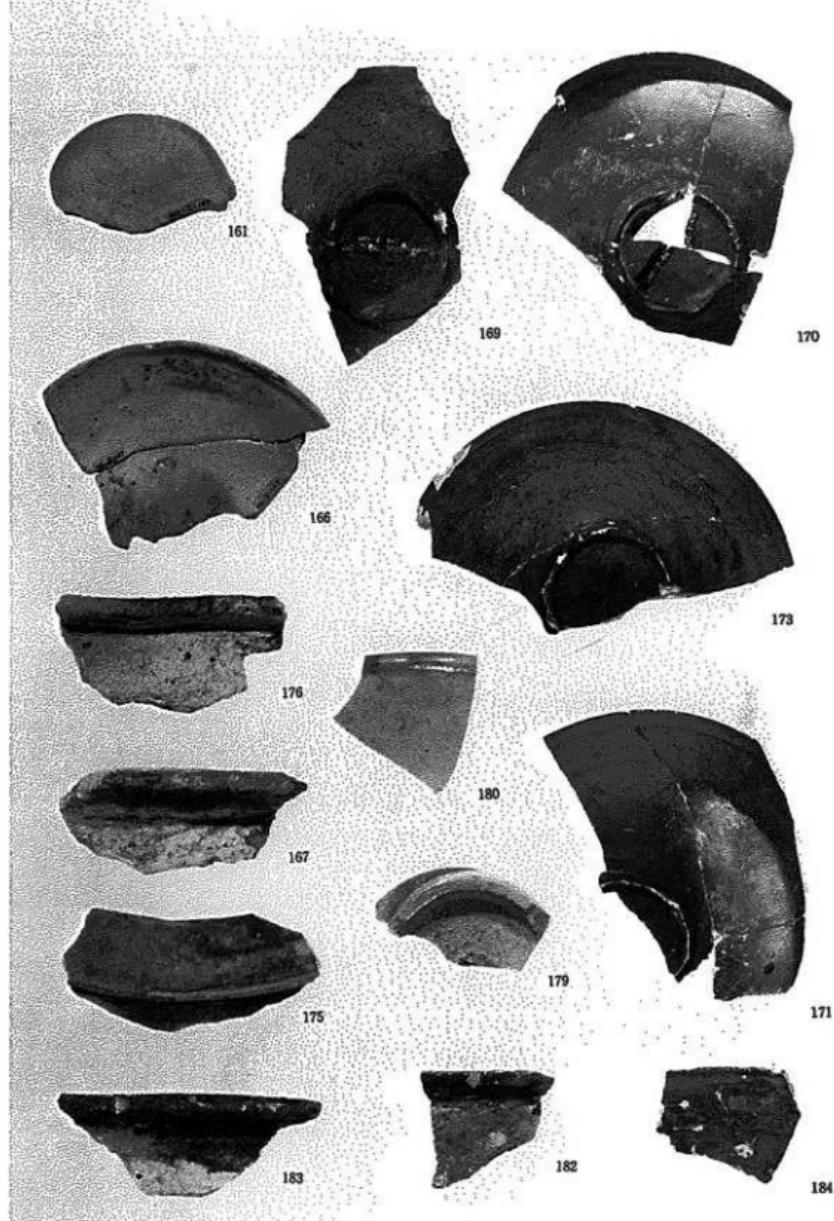


155

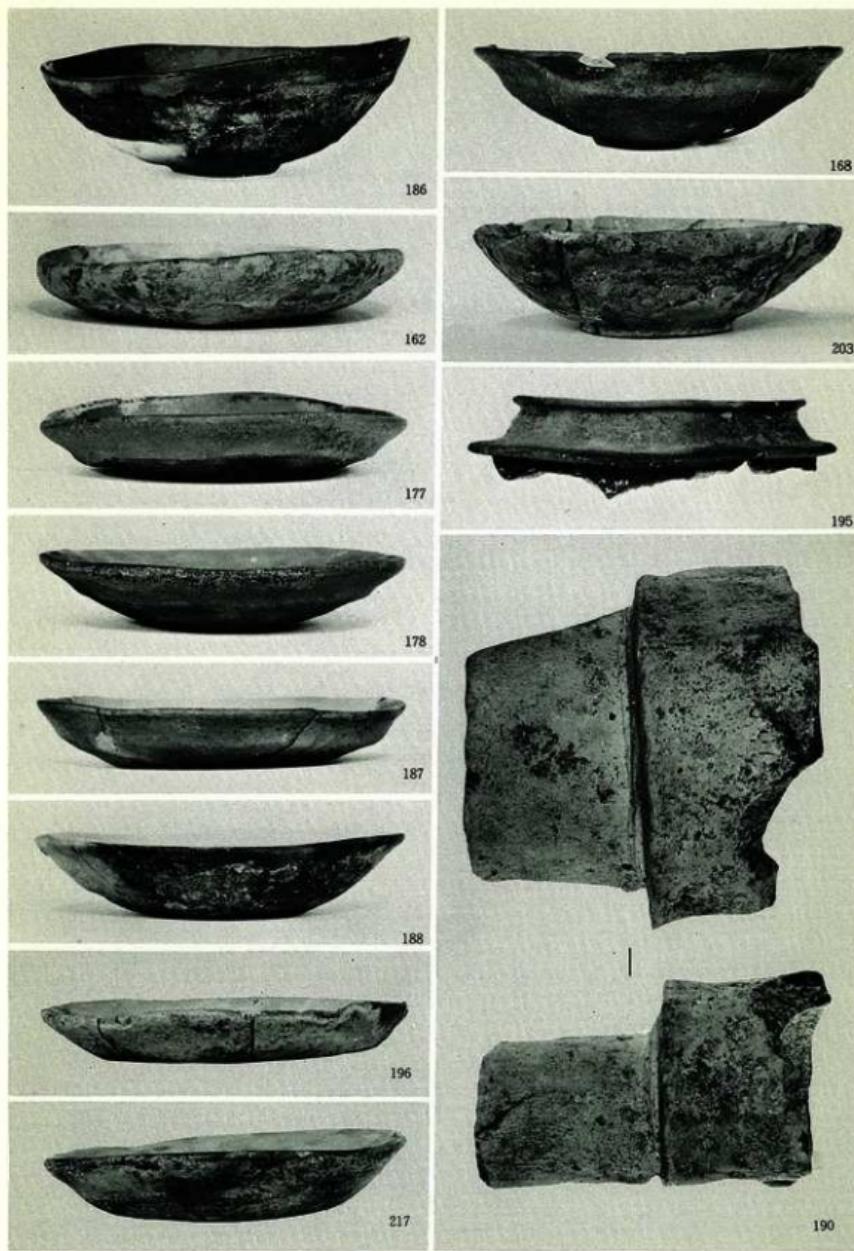
圖版二六 平安時代中・後期遺構、包含層出土土器



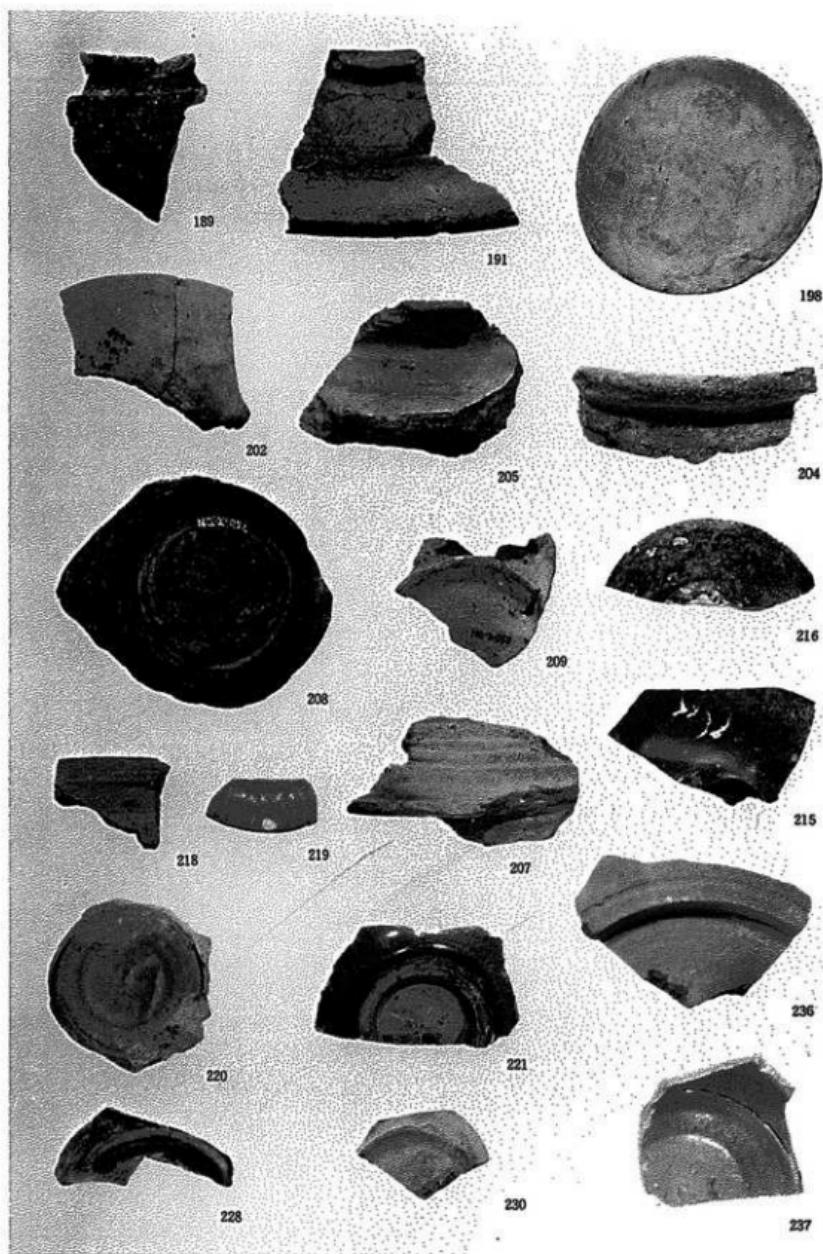
図版二七 鎌倉時代大溝、井戸7出土器



圖版二八 鎌倉時代遺構、包含層出土土器



圖版二九  
鎌倉時代遺構、包含層出土土器



## 長 原

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和60年6月29日発行

大阪府教育委員会  
財団法人 大阪文化財センター  
大阪市城東区靄生2丁目10番28号

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪市東成区深江南2丁目6番8号

